

部隊を掃射して、一舉に夥しい敵兵を殲した。この時、わが各機は、合計十一弾をその機翼に受けたが、ほかに何の損害もなかつた。

また、内藤大尉の率ゆる〇〇機〇機は、同じ日に三百米までの低空に急降下して、真茹の頑敵を徹底的掃射した。この時、わが機は敵弾一發を受けたりであつた。

二月二十六日には、玉井大尉の率ゆる〇〇機〇機が、蘇州附近の敵陣地に、地上すれ／＼の感ある二百米まで急降下して、敵陣地の兵を痛快に薙ぎ倒した。

かうした地上掃射を行つたわが飛行機は、その延機數二百五十六に及び、空中で敵弾を受けた飛行機は、七十機に達し、弾痕の數は實に百七十六を算した。

この弾痕は、空中戦と地上からの射撃によつて生じたものであるが、平均一機につき二・五發といふことになる。

筆者が、上海事變におけるわが海軍航空部隊の戦闘について、比較的詳しく述

べた譯は、海軍航空部隊が創設されてから初めての本格的戦闘であり、この戦闘の貴重な體驗が、やがて支那事變や大東亞戦争におけるわが海軍航空部隊の周密な作戦と、巧妙な戦闘ぶりと、さらに眞摯敢闘の烈々たる海軍航空魂の温床ともなつた最も意義ふかい戦闘であつたからである。

むしろ、その後わが海軍航空部隊は、その戦術、技術、飛行機、搭載兵器など、隔世の感ある長足の進歩を遂げてゐる。

たゞ變らないものは、一死皇國に報ゆる敢闘精神であるが、それも支那事變以來ますます磨きがかゝつてゐることは争はれぬ事實である。

支那事變と海軍航空部隊

一七六

渡洋爆撃壯學錄

吼ゆる支那海

波は吼え、風は唸り、雨は瀧のやうに降りそゞいでゐる。

わが渡洋爆撃隊は、この暴風雨の支那海を突き破つて、まっしぐらに大陸を指して翔けた。

昭和十二年八月十五日のことで、いまや渡洋爆撃隊は、七二〇耗の颱風の中心に差しかゝつたのだ。

横なぐりの雨は、烈風と共に飛行機の胴體の中へ叩きつけてきて、操縦手も、銃手も、通信手もびしょ濡れになつてゐる。

視野が全然利かないので、各隊の各機は、ほとんど水面と擦れくゞに飛んだ。高空に上昇すれば、或ひは視野が利くかも知れぬと、ぐツと高空に舞ひあがつてみたが、いくら高く昇つても、依然として視野は利かない。再び下降して水面擦れくゞに飛ぶよりほか仕方がなかつた。

支那海の怒濤は、ともすれば高く波頭なみがしらを擡もたげて、飛行機を一と呑みにしようとする。

機上では乗員同志が勵ましあひ、各隊では、各機が互ひに勵ましあつて、遮二無二にこの颱風圏内を突破しようとして奮闘した。

だが、何たる自然の暴威であらう。整然たる編隊は、いつの間にかバラくゞになつて、視野の利かない大洋の上を、たゞ一機だけで渡つてゐるやうな状態とな

つた。いかに豪膽な勇士でも、かうした状態に陥つたならば、一種の焦躁と心細さを感じずには居られないであらう。

だが、わが勇士たちは、

「何だ、これしきのこと！」

と、齒を喰ひしぼりながら、地圖と羅針計と睨み合ひつゝ、一路敵都南京を目指して飛んだ。

この颱風は、渡洋爆撃隊が基地を出發して發生したのではなかつた。基地を出發する前から、氣象觀測によつてハッキリと分つてゐた。では、どうしてこの困難な颱風圏内を冒してまで渡洋爆撃を敢てしたかといふことになるが、それにはそれだけの理由があつた。

七月七日夜、北京郊外の蘆溝橋に起つた支那兵の不法射撃に端を發した北支事變は、わが國が不擴大主義によつて、現地解決をしようと努力したにも拘らず、

無智にして驕傲な支那政府の要人や軍人は、この機會を捉へて、日本勢力を大陸から驅逐しようといふ愚かな考へを持つた。

そして、さかんに大軍を北上せしむると共に、一方では支那全土にわたつて、毎日抗日の態度を激化した。

その結果、上海では八月九日夕刻、わが上海特別陸戦隊の大山大尉と齋藤兵曹が、虹橋飛行場東方越界路の路上で、暴戾な支那軍のために不法射撃を受けて虐殺さるゝにいたつた。

支那軍は、わが方の抗議に對して誠意を示さないばかりか、上海のいたる處でわが陸戦隊の歩哨を狙撃し、八月十三日午後には、支那軍自慢のマルチン爆撃機を上海の租界に飛來して低空示威飛行を試み、さらに翌十四日午前九時頃から、上海港内に碇泊中のわが艦船をはじめ、陸戦隊本部、日本總領事館などを空襲した。これらの飛行機は、何れも支那軍が無敵と誇る精銳な爆撃機であつた。

幸ひ、わが方には少しも損害はなかつたが、血迷つた支那飛行機は、亂暴な盲爆によつて、英人經營の倉庫や、米國のスタンダード石油會社油槽などに爆彈を落して火災を起させ、さらに南京路の國際社交場であるカセイ、パレス兩ホテルと、租界の歡樂場「大世界」を盲爆して、一舉に無辜の民衆二千數百名を殺傷したのである。

この亂暴ぶりから推斷して、彼等はいつ日本人街を盲爆しないとも限らぬ。

上海港内に碇泊してゐる帝國軍艦出雲その他の艦載飛行機は、遂に蹶然と起ちあがつた、支那の飛行機を攻撃し、忽ちこれを上海の上空から驅逐して、わが海軍航空隊の勇敢とその神技を遺憾なく發揮したが、敵機は南京、南昌、杭州その他の飛行場から續々増援して、明らかに上海にあるわが軍・官・民を攻撃する氣配があつた。

事すでにこゝに至れば、もはや一刻も猶豫が出来ない。

すなはち、敵機がわが陸戰隊本部及び總領事館を攻撃した十四日の午後二時、長谷川第三艦隊司令長官は、艦隊をして自衛上必要な手段を執る旨を聲明すると共に、一方、待期中の海軍航空部隊の出動となつたのである。

難航、颱風圈を突破

渡洋爆撃隊の基地は二箇所であつた。

假にこれをA基地と、B基地にしておかう。

A基地に待期してゐた新田大尉らの海軍航空部隊は、すでに十四日この颱風の支那海を渡つて、杭州、笕橋、喬司、廣徳の各飛行場を急襲して敵機二十數機を撃墜破した。

こんにち、東京の海軍館の後庭に陳列してある彈痕だらけの双發の飛行機は、

この十四日の渡洋爆撃に参加した大串機で、片肺（一方の發動機）が敵弾のために故障を生じたので、片肺のまま、あの暴風雨の支那海を突き破つてその基地に歸還したものである。

B基地に待期してゐた勇士たちは、A基地の僚機に先陣の功を奪はれた形であつたが、しかし、

「敵首都南京の飛行場を徹底的に爆撃せよ」

といふ命令だつたので、あだかも敵將の首級をあげよといふやうな重い命令を受けたことに満悦して、勇躍その征途に上つたのであつた。

海軍航空部隊は、すでに大正十五年に上海——佐世保間を一氣に八時間で飛び、昭和四年には純國産機が、横須賀——サイパン間を無着水で飛んだほどの技術を持つてゐる。それから、もはや八年も経過してゐるので、驚くべき進歩をきたしてゐることには相違ない。

けれども、こんどの渡洋爆撃は颱風の支那海を往復し、しかも大陸に基地を持たないばかりか、着陸したが最後、地上の敵兵から攻撃されるといふ極めて條件の困難な飛行である。

それにしても、驚くべき長足の進歩をしたものだ。

前の歐洲大戰では、イギリスやフランスの空軍は、ドイツの首都ベルリンを空襲したくて仕方がなかつたが、飛行機の航続距離がそれを許さないもので、フランス、クフルト、アムマイン、スツットガルトなどの都市を空襲したにすぎなかつた。尤も、後になつて英佛は長距離爆撃機を製造したが、それは戦争に間にあはなかつた。間にあつたところで、果してベルリン空襲が出来たか、どうかは疑問であるが——。

わが海軍航空部隊の渡洋爆撃に比べると、英佛空軍の獨逸諸都市空襲など物の數でもない。況んや、七二〇耗の颱風圏内の洋上を突破してこれを敢行するな

ど、世界の誰もが夢想さへしないことであつた。

あだかも、わが海軍航空部隊が長驅ハツイ空襲を敢行したやうなもので、率直にいへば、わが海軍航空部隊が一たび意を決すれば、前述のごとくその前に不可能といふものはないのだ。

けれどもそれは神業でも奇術でもない。生死を超越した烈々たる報國の至誠が然からしむるのである。

A 基地を出發した渡洋爆撃隊は、この物凄い暴風雨を、天の與へた大事決行前の試練として苦闘しつゝ、進航をつゞけてゐるうち、いつの間にか褐色に濁つた海上に出た。

(やア、揚子江に近づいたのだ。もう一と踏ん張りだ)

勇士たちは、その濁つた水は揚子江から吐きだす濁流であることを知つて、いよく大陸に近づいたと思つた。それと同時に、山や岩石などに衝突することを

避けるためぐつと高度を上げた。

果して間もなく、上海附近の陸地に上陸した。

颶風は、陸上を進むにつれて次第に弱つてきたが、空には雨雲が垂れこめてゐて視野は依然として利かない。

各隊の指揮官機は、陸上に達すると同時に、部下の各機をまとめて編隊を組み一路南京に向つて飛んだ。

視野が利かないので、揚子江と滬寧鐵道を道しるべとして、文字通り地上すれすれの低空飛行を行つた。

各地には、敵の地上部隊がゐたが、空低く飛んでゆく大編隊を眺めながら、味方機の演習とでも思つたらしく、手を翳しながら呑氣に眺めてゐる。まさか、この暴風雨を冒して、日本の空軍が大陸へ飛んで來ようなどとは夢にも思はなかつたらしう。

だが、敵もさるもの。

——この悪天候を冒して演習をするやうなことは、支那の空軍にはあり得ないことだ。ひよつとしたら、日本の航空母艦が、大陸近くに航行してきて、そこから艦載飛行機が舞ひあがつたのかも知れないと気がつき、始めて双眼鏡で凝視すると、その銀翼には鮮かに日の丸が描かれてゐるではないか。

「日本空軍來たる」

「日本飛機の襲來だ」

「南京を襲ふらしい」

「早く打電せよ」

敵地上軍の狼狽と驚愕はその極に達し、彼等が口々に叫びながら、右往左往してゐる様が、機上から鮮やかに見られた。

行きがけの駄賃、二機を屠る

蘇州の上空を過ぎたころに正午となつた。

わが機上の勇士たちは、主計兵たちが眞心をこめて拵こしらえてくれた竹の皮包の辨當を開いたが、支那海の猛烈な暴風雨と闘つて、頭腦と肉體を極度に働かし、可なりの空腹を感じてゐただけに非常に美味かつた。

甘いものの好きな乗員のために、チョコレートさへ添へてあつた。乗員たちはその好意を感謝しつゝ、分けあつて食つた。

空腹が充たされて、一段と元氣が出た。大陸の奥に進むとともに、風も凧ぎ、雲も霽れて、安穩な飛行となり、調子のよいエンジンの響は、ともすれば睡氣さへ誘はうとする。豪膽さはまらない心境だ。

大編隊中の一隊である平本隊が、太湖の上空近く来たとき、突如として前方の断雲の間から敵機が現はれた。

カーチスホーク二型と三型の戦闘機で、一機、二機、三機と續々と断雲の間から舞ひ降り、遂に七機となり、小癩にも我を邀撃するやうな陣形をとつた。

「お出でなすつたな」

わが機上の勇士たちは、顔を見合せてニコリ笑つた。

すでに、敵を呑んでかゝつてゐるのだ。

敵機は、單縦陣をなして反航しつゝ、早くも千米に接近した。

前方に展開してゐる眞夏の晝の太湖の湖面は、きら／＼と強烈な太陽の光を反射して、眼を射るやうだ。敵は、これを利用したのかもしれない。

彼我の距離千米を少し割つたと思つた頃、敵機は急に機關銃を射ちだした。だが、何處を狙つてゐるのか一發も中らない。

わが方は、できるだけ敵を引き寄せておいて、隊長の命令一下、一齊に火蓋を切つた。

ダダン、ダン、ダン……。

初陣の血祭とするわが弾丸は、急霰のごとく敵機へ叩き込まれた。

早くも敵の一機は、黒煙を吐いて編隊を離れたと見る間に、刻々と眞紅の火焰が燃えさかり、やがて火達磨となつて、太湖の水面に、まつさかさまに落ちていつた。

これに怖氣がついたのか、敵機群は俄かに浮腰となつて隊列を紊し、われ先にと雲の中へ逃げ失せてしまつた。

「たわいのない奴等ぢやのう」

平本隊長は、部下たちを顧みながら愉快に笑つた。

逸る僚機たちがこれを追撃しようとする、平本隊長は、

「目的は南京飛行場攻撃にあり、道草を取つてはならぬ」と命じて、一路南京城を指した。

なほ、このほか入佐少佐の率ゆる一隊も、太湖上空で敵戦闘機四機に遭遇したが、見る／＼うちに一機を湖上に叩き落とし、他の三機に損害を與へた。

さらに、林田隊は南京に近い鎮江の上空で、われを邀撃せんとする敵機と出會つたが、敵は戦はざるに先だつて、一目散に逃げだした。

これらの敵機は、「日本空軍來」の電報又は電話に接して、わが空軍を南京に入れまいと邀撃に出たのであるが、あべこべに撃破されて、支那空軍の弱體を暴露する役割を演じたにすぎなかつた。

壯烈な若鷲の自爆

南京及びその附近には、百機あまりの敵機があつた。

彼等は日本空軍襲來の飛電に接して、それ／＼の部署についたが、南京に来てみると、わが海鷲が豫想した機數よりも少なかつたところを見ると、あるひは第一次上海事變の際に、飛んでもない方面へ逃避した空軍があつたやうに、こんどもまた何處か安全地帯を求めて逃避したものがあつたのかも知れない。

林田隊は、午後二時二十五分、早くも南京郊外の大校場飛行場の上空へ一番駆けをした。

俯瞰すると、整然たる三棟の格納庫前に十數臺の飛行機が、今しも舞ひあがつて、我に挑戦するやうな姿勢をとつてゐた。

林田隊は、三百米までに急降下して爆彈の雨を降らせ、忽ちにして數機を炎上させ、格納庫を木ッ葉微塵に叩き壊はした。

つゞいて各隊も、入れ代り立ち代りして徹底的攻撃を加へ、格納庫も、滑走地

區も、飛行機も全然使用不可能に陥らしめた。

これで、渡洋爆撃の目的は達したわけであるが、しかしわが海鷲はまだ喰ひ足らぬものがあつた。それは敵機と渡りあつて、華々しい一戦を交へないことであつた。

ところが、林田隊が飛行場の爆撃を終つて、まさに歸途に就かうとして南京上空に現はれた時、突如として敵の戦闘機六、七機が編隊を組んで我に挑みかゝつてきたのだ。

「好敵ようこそ！」

とばかり、林田隊はたちち銃口を開いて銃撃し、瞬間にして敵の一機を叩き落した。

地上からも、あらゆる砲火が弾幕となつて飛來する。わが荒鷲の大翼にも、ブス／＼と不気味な穴があく。

いさゝか手持無沙汰になつてゐた林田機の太田爆撃手は、隊長に頼んで機銃の射撃をしてゐるが、けなげにも敵の戦闘機一機が、猛然として林田機の間近に迫つてきた。

「おのれ……」とばかり、太田一等航空兵曹は、狙ひを定めて猛射を浴びせると脆くも敵機は忽ち火を吐きながら、南京市街の真ん中に落ちていつた。

市街には、この燃える飛行機の火が移つて大火災が起つた。

林田隊長は、

「太田、でかしたぞ」

と言ひながら太田一等航空兵曹を覗くと、何とも返事がなく、ガツクリと首をうなだれてゐる。顔面に二發、肩に一發の貫通銃創を受けてゐるのだ。

「しっかりしろ、傷は浅いぞ」

林田隊長は、かう言つたものの、もはや絶望であることをよく知つてゐた。

平本隊も、大校場飛行場を爆撃の後、南京市街南方の上空で敵機十臺内外の編隊と出會つた。

忽ち壯烈な空中戦が展開され、敵機は面白いやうに一機、二機と落ちてゆく。遂に五、六機が見る／＼うちに叩き落された。

この時平本隊の四番機から火があがつた。ガソリンタンクを射貫かれたのだ。火勢は次第に大きくなつてゆく。

僚機たちは、その左右に集つて、四番機の最期を見とるやうにした。

四番機の若鷺たちは、最後の袂別をなすものの如く、隊長機から順次に僚機に向つて敬禮をして、一氣に敵の軍事施設を目がけて飛び込み、壯烈きはまりない自爆を遂げた。

僚機の勇士たちは、悲壯な感慨をもつて、その英靈を弔つた。

平本少佐の搭乗する一番機は、常に僚機の先頭に飛んで奮闘してゐるうち、片

方の發動機に敵弾が命中して片肺となつた。

速力は急に鈍り、高度は次第に落ちてゆく。僚機たちは隊長機を案じてその周囲を取りまき、敵の攻撃を防禦したが、平本少佐は信號をもつて、「本機に構はず直ちに歸還の途につけよ」と信號した。しかし僚機たちはその側から離れようとしなかつた。

上官は部下を愛し、部下はまた上官を尊信して相信倚あひしんきすること父子、兄弟もたゞならぬのが帝國軍人の精神である。どうしてこの危地に陥つた上官機を見捨て、部下機ばかりで引きあげることが出来よう。

けれども、平本少佐は嚴然として命令をした。

「上官の命令に従つて、直ちに歸還の途につけ」と。

上官の命令は神聖にして冒すべからざる絶対のものである。

今は部下たちも心を鬼にして歸還の途につかざるを得なかつた。

「航空兵操典」の綱領には、こんなことが書いてある。

指揮官ハ軍隊指揮ノ中樞ニシテ、又團結ノ核心ナリ。故ニ常時熾烈ナル責任觀念及鞏固ナル意志ヲ以テ、其ノ職責ヲ遂行スルト共ニ、高邁ナル徳性ヲ備ヘ、部下ト苦樂ヲ俱ニシ、率先躬行軍隊ノ儀表トシテ其ノ尊信ヲ受ケ、劍電彈雨ノ間ニ立ち、勇猛沈著、部下ヲシテ仰ギテ富嶽ノ重キヲ感ゼシメザルベカラズこの場合における平本少佐の態度が、正にそれである。

すなはち、部下の私情を汲んで、その歸還を遅らすやうなことがあつてはならぬ。もし、傷いた自分の飛行機を護るために、多數の敵機に襲撃され、そのために僚機を損傷するやうなことがあつてはならぬ。

軍人も兵器も 天皇陛下のものである。それを私情のために損耗するやうなことがあつては申譯がない——平本少佐は、かうした鞏固な意志をもつて、嚴然と命令を下したのであつたらう。

僚機たちは、幸ひ敵機の逆襲もないといふ見透しがついたので、一路基地へ急いだ。

平本少佐の一番機は、刻々に浮揚力を失つて、地上へ近づいてゆく。

基地へ歸るには、大陸を越え、支那海を渡らねばならぬ。だが、この分ではたうてい基地はあるか、大陸を越えぬうちに不時着して了はねばならぬ。

ガソリンを點検してみると、それは歸還するだけの量が残つてゐる。

そこで平本隊長は、部下に命じて重量のある物を機外に投下するやうにした。差當つて、現在必要でない物品は悉く投下された。果して、浮揚力は次第に増してきたが、隊長はさらに機内を見まはして、最後に残された重い道具箱に眼をつけて、

「それも投下しろ」と命じた。

それには整備員の生命とする發動機その他の故障を修理する道具が充滿してゐる

た。たしかに重い品物ばかりである。

整備員は驚いて、

「これもですか！」

と、我^{われ}とわが耳を疑つた。

「さうだ」

「けれども……」

整備員は躊躇してゐる。

「今は、そんなものに執着してゐる時ではない。いゝから棄てる」

整備員はわが身を削るやうな思ひをして、重い道具箱を両手で抱へながら窓外に抛りだした。

浮揚力はますます加はり、まだ颱風の衰へぬ支那海を突破して、無事にB基地へ歸還したのである。

これこそ、機に臨み、變に應じて勇猛沈著、その處置を誤らなかつた賜物でなくて何であらう。

全世界驚倒す

わが海鷲の大奇襲に震駭愕伏して南京から逃げ去つた敵機も、わが海鷲が南京飛行場を完膚なきまでに撃碎して、漸く歸還の途につくと、何處へ潜んでゐたのか、ぼつ／＼南京の上空に姿を見せるやうになつた。

入佐少佐の率ゆる一隊は、大校場飛行場を爆撃した後、なほも南京市内およびその附近の敵軍事施設を索めて、勇敢無比な爆撃を敢行してゐると、紫金山あたりの上空から、斷雲を破つて敵の戦闘機十數機が、一齊に舞ひ降りてきて、まっしぐらに入佐隊に向つて挑戦してきた。

「ちよこさいな奴等だ」

わが勇士たちは、たゞちに應戦態勢をとつてゐると、敵機はその輕快な性能に物をいはせて、前後左右上下から襲ひかゝつてきた。適當の射程距離に接近するのを待つて、入佐少佐は射撃命令を下した。

ダツ、ダツ、ダツ、ダダン

敵味方の火器は、物凄い火蓋を切つて大空中戦を展開した。

敵の地上砲火は、敵機の彈丸と共に、絶え間なくわが乗員の身邊を掠めて飛び去つた。

入佐機の射手は、さきに往航の際、太湖の上空で敵機一機を撃墜し、一機に損害を與へた名射手である。

剛毅沈着、狙ひを定めて放つた銃彈は、早くも敵の一機を火達磨にして叩き落とし、つゞいて他の一機を、物の見事に撃墜した。

僚機の射手たちも、敵の射手を殲し、或ひは發動機を射貫き、敵に大損害を與へた。戦列を脱してゆく敵飛行機も少くなかつた。これらは何れ何處かへ墜落するか不時着をしたのであらう。

この時指揮官機の渡邊勇航空兵曹長は、頭部に敵の一彈を受けて、その前に展げてあつた航空地圖を眞紅に染めながら、名譽の戦死を遂げた。

渡邊兵曹長は、名爆撃手として聞え、大校場飛行場爆撃の際には、一發一中の神技を發揮して、格納庫や兵營や滑走地區などを粉碎したのであつた。

「残念なことをした」

入佐少佐は、渡邊兵曹長の悲壯な最期の姿を眺めながら沁々と言つた。

多勢を恃んで挑戦してきた敵も、一機又一機と次ぎ／＼に撃墜されたり、破壊されたりしてゆく慘めな姿に慄えあがつて、間もなく全機悉く逃げ失せてしまつた。

入佐隊は、たゞ一つの悲みとして残つた渡邊兵曹長の遺骸なきがらを載せながら、暗夜の支那海を渡つてA基地に歸つた。

かうして、最初の渡洋爆撃は大成功を収め、わが國の朝野を感激と感謝のあらしに巻き込んだ。

世界各國は、この報を聞いて齊しく日本海軍航空部隊の渡洋爆撃に驚倒し、日本恐るべしとの感を深くした。

事實、かうした渡洋大爆撃は、世界戦史空前のことであり、殊に支那海の大暴風雨を突破してこれを敢行し、しかも僅少な犠牲によつてかゝる赫々たる戦果を収めたことは、世界の空中戦に未だ曾てないことであつた。

この頃から、明かに日本との一戦を豫期してゐた米英の軍當局は、この意想外な大空襲の戦果を見て、恐らく慄然として驚愕したであらう。

果してその戦慄は、今日の大東亞戦争におけるわが海軍航空部隊の活躍によつて、

事實となつて現はれてゐるのだ。

なほこの日、他のわが海軍航空部隊は、南昌、笕橋、喬司、紹興の各飛行場を爆撃して、素晴らしい戦果をあげたが、この日の総合戦果は、敵機の撃墜、地上爆破等實に四十數機に達した。

その後も、引きつゞいて渡洋爆撃が行はれ、その都度敵の心膽を寒からしむる大戦果をあげたことは、世人周知のとほりである。

南昌の大空襲

二〇四

空中勤務と地上勤務と

支那事變もすでに一年を過ぎた。

敵都南京は早くも陥落し、北支、中支、南支の各要衝も、ほとんど皇軍の制壓下に服した。

たゞ、南昌その他の飛行場を根據とする敵機が、思ひ出したやうに皇軍の占領地に出没したり、皇軍の動靜を偵察したりするのが邪魔ツ氣だつた。

事變前から持つてゐた敵機は、わが海陸軍のため殆ど全滅されたが、蔣政權を踊らせてゐる米、英、ソなどは、その優秀な飛行機と乗員をどし／＼送つて、し

かりにその再建に努めた。

そのうちでも、南昌飛行場には最も力を入れ、優秀な飛行機と乗員を配備して虎視眈々、皇軍爆撃の機を覘つてゐると傳へられた。

わが海軍航空部隊は、もし彼等が襲撃したならば、一撃のもとに撃破する態勢をとつてゐたが、敵機は晝の間は何處かへ出かけ——といふよりも逃避してゐて、夜になつてから、こっそりと南昌飛行場にかへつてくるといふ状態であつた。

(南昌の敵機を撃滅するには、彼等が飛行場にかへつてゐるところを急襲するよりほか方法はない)

わが海軍航空部隊の意見は、かう決定したのである。

そこで、昭和十三年七月十八日——ちやうど支那事變滿一周年を過ぎること十日目の未明、わが精銳なる海鷲をもつてこれを急襲することになつた。

この重任に當つた指揮官は左の人々である。

〇〇機隊指揮官	海軍少佐	松本眞實
〇〇機隊指揮官	海軍大尉	南郷茂章
〇〇機隊指揮官	海軍大尉	渡邊初彦

この指揮官たちは、事變勃發以來、支那大陸の大空を縦横無盡に翔けまはつてあるひは空中戦によつて敵機を撃墜し、あるひは地上爆撃によつて、敵の飛行場、砲臺、密集部隊、橋梁、鐵道線路、艦船、その他の重要軍事施設を片ツ端から撃碎した百鍊千磨のつはものであり、また各隊の部下たちも、指揮官機に従つて、以上のやうな偉大な功績をあげてゐる勇士である。

まことに、勇將のもと弱卒なしといふ諺どほりの無敵荒鷲隊である。

殊に、〇〇機隊指揮官の南郷大尉は、

「西にリヒトホーヘン、東に南郷大尉」

と稱されるほどの至妙の神技を有し、參戰以來の敵機撃墜百數機といはれてゐ

る猛將である。

七月十八日の夜はまだ明けきららずに、遠くの地平線に一抹の白線が、仄かに横つてゐる。

爽涼たる大陸の曉風は飛行場の綠草にやどる朝露を柔かく吹いて、集合地點まで歩いてゆく勇士たちの飛行服をしとゞに濡らした。

この空模様では、けふは一日中快晴で、眺向きの飛行日和であることが豫想される。

この各隊の飛行機は、何れも艦載機であるが、すでに大陸の一角に基地を得たので、南昌爆撃もこの基地から出發するのであつた。

地上勤務の整備員は、昨夜から愛機の翼下に寝てゐたが、すでに起きあがつて、爆弾の積込みや、ガソリンの注入などを終へ、各々專屬機の發動機の點檢をしてゐた。

「お早う、御苦勞さま」

乗員たちが挨拶をすると、

「そちらこそ御苦勞さま」

と、整備員たちは、晴れの征途につく乗員たちを慰撫した。

この整備員と乗員とは、車の兩輪、鳥の兩翼のごとき關係を持つてゐる。乗員の華々しい戦功の蔭には、いつも整備員の人知れぬ勞苦が伴つてゐる。航空操典には、專屬機付は、飛行機の出發及び歸還に當つては、所要に應じ、操縦者の指示によつて行動すべきものとされてゐるが、事實は一心同體である。

もし、整備員の專屬する飛行機の歸還が豫定の時間よりも遅いやうなことがあつたり、あるひは他の僚機が歸還したのに、自分の係りの飛行機がまだ歸らぬやうなことがあれば、彼等は居ても起つてもをられない焦躁と苦悶を覺える。

けれども、遙かの上空に自分たちの愛機が姿を見せるものなら、彼等は歸宅の

遅い愛迎を迎へた母のやうに悦ぶ。どんな遠い空にゐても、そのエンジンの調子や、飛行機の癡などによつて、直ぐ自分の愛機であるか何うかを見定めるのだ。

それほど、かねて愛機に對する關心が深い。假にAや、Bや、Cなどといふ一つの飛行機は、必ずしも搭乗者ばかりの愛機ではなく、地上專屬員の愛機でもある。この飛行機を愛する兩者の氣持が、渾然一體となつて、魂ある飛行機となり、搭乗者の豪膽無双な敢闘精神を汲んで、その意の如く働くのである。

ハワイ大海戦の際、母艦の專屬機附の整備員たちが、搭乗者に對する心づくしの數々や、歸らぬ二十九機の整備員たちの限りなき哀愁は已に世に傳へられてゐるが、その氣持は、總ての整備員に共通なものだ。

やがて、司令の嚴肅な命令と、細かい注意が與へられた。

乗員たちは、敬虔にして凜烈たる氣持をもつて、一言隻句も聞きもらさじとして緊張した。

南郷少佐の戦死

まだ明けきらぬ大空には、研ぎすまされた弦月と、寶玉のやうな星が一面にひろがつてゐる。

基地を出發した堂々たる大編隊は、次第に高度を高めてゆく。眞夏とはいひながら、上空に昇るに従つて寒さが加はつてくる。出發前に、朝食として重湯おもゆ一椀だけ食つてきた人々が多かつたので、寒さが一層身にこたへた。

やがて南昌飛行場の上空に來た。

まだ、曉の幕が重く垂れこめた飛行場に、約三十機ばかりの敵機が、悠々と翼をひろげて眠つてゐる。

まさか、こんな早曉にわが海鷲が襲來しようとは、夢にも思つてゐないらしい。

丁度、ハワイの敵が、わが海鷲の襲撃をうけた瞬間まで、なんにも知らずに惰眠を貪つてゐたことによく似てゐる。殊に、ハワイ奇襲は十二月八日であり、南昌奇襲は七月十八日と、八の日であることに、微笑ましい符節の妙を覺える。

由來、八は開くといふ意味に使はれ、末廣すえひろの意味を持つものとして、縁起のよい數字とされてゐるが、それが、偶然か、あるひは特にこの日を選んだのか、何れにしても幸先さいさきよき日に打ちつかつたものである。

松本、渡邊兩指揮官の率ゆる各隊は、命令一下、たゞちに急降下して、地上の飛行機に向つて爆撃を加へた。

一弾、二弾、一發一中の手練の爆弾を投下すれば、忽ちドス黒い煙と、惡魔の舌のやうな紅の焰が立ちのぼり、一瞬にして南昌新飛行場は修羅の巷となつた。この急襲に驚いた敵の中には、逸早く逃走を企てて、燃えない飛行機を操縦しながら舞ひ上るものがあつた。恰も燒野の群鳥が、身近みぢかに迫つた猛火に驚いて、

慌しく飛立つさまに、そっくりだ。

この事あらんと飛行場の上空を旋回して、一は味方機の地上攻撃を掩護し、一は敵機の逃避を警戒してゐた南郷大尉の指揮する〇〇機は、敵機が射程圏内に飛びこんでくるまで悠々と旋回し、いよく射程圏内に這入つたのを待つて、一齊に銃撃の火蓋を切つた。

やつとの思ひで、地上の地獄をのがれた敵機は、思ひがけなくも優勢な戦闘機の攻撃にあつて、しどろもどろの狼狽ぶりだ。

普通人が、高度千米もの空に昇つて動作をしたならば、眼まひがして辣みあがるであらうが、わが機上の勇士たちは、まるで平地で動作をするが如く、自由自在、思ふがまゝの活動をする。この境地に達するまでには烈しい訓練を経なくてはならぬが、わが海軍航空部隊は、前述のやうにワシントン會議やロンドン會議による軍縮の結果、それを補ふために、たゞ一つ残された無制限の航空兵力を増

強するために血みどろの猛訓練をつゞけてきたので、將兵の質の向上はいふまでもなく、飛行機、火器など世界列強の水準をはるかに凌駕するにいたつた。

その精銳な空軍の中の華といはれる南郷大尉の指揮する一隊にかゝつたのであるから、逃げ足たつた敵機が齒の立つ筈はない。

それでも敵機は、窮鼠猫を嚙む形でわか南郷隊に双向つてきた。

これは、南郷隊にとつては願つたり叶つたりである。なぜならば、その快速力にまかせて逃げだしたのでは、これを撃破するのに不便であるが、うろくとわが射撃圏内をさまよつてゐれば、却つて撃破するのに便利であるからだ。

先づ、南郷指揮官の放つた第一弾は、たゞ一發のもとに敵の戦闘機一機を撃墜した。敵機はその急所を撃たれたのだ。

僚機たちも、われ遅れじと勇戦奮闘する。見る／＼うちに、二機、三機、四機と火達磨になつて落ちてゆく。

松本、渡邊兩隊は、南郷隊の掩護のもとに、低空飛行をしながら、思ふ存分の活躍をしてゐる。

(愉快な戦闘だな)

南郷隊の勇士たちの唇頭には、ひとりでに會心の微笑が浮ぶ。

南郷大尉は、折から真近に現はれた敵機に向つて襲ひかゝると、敵は急に下降して逃げまはる。逃がしてなるものかと追ひかけると、こんどは驚くべき速度で急上昇を始めた。南郷大尉は回轉機銃をもつて、上昇する敵機の下腹目したばらがけて猛射した。

妙技神しんに達する大尉の狙ひに狂ひがある筈なく、急所を撃たれた敵機は、不軌の運動をなしつゝ、加速度に墜落してくる。

その下方にあつた南郷機は、大空をよるめきながら落ちてくる敵機を避けるため旋回しようとした瞬間、

「呀ッ！」

といふ間に、加速度に落ちくる敵機は南郷機の左翼に、猛烈な勢ひで觸衝した。その刹那、南郷機は一瞬にして空中分解を起してバラ／＼となり、南郷大尉らは壯烈な戦死を遂げた。

空の至寶と稱され、敵機は「南郷機來たる」と聞けば、恐怖狼狽して戦はずして逃げるといふ状態であつたが、不可抗力の災難とはいへ、かうした思ひがけない戦死を遂げたことは、返す／＼も惜しいことである。

なほ、南郷隊はこの戦闘で、見事敵機八機を撃墜した。

支那事變勃發以來、南京、蕪湖、安慶その他の空中戦に参加して見敵必殺、敵機を屠ること正に百數機、誰いふとなく、前述のやうに「西にリヒトホーヘン、東に南郷」と稱されるにいたつた。

リヒトホーヘンは、世人周知のとほり、第一次歐洲大戦の際、ドイツの青年飛

行將校（男爵）として参戦し、英 佛等の聯合國側の敵機を撃墜すること八十機に及んだが、フランスの上空で、英國の名もなき一航空兵のために撃墜されて戦死したのであつた。

南郷大尉の場合は、撃墜されたのではないが、その不慮の遭難は、リヒトホーヘンの最期に一脈相通ずるところがあつて痛ましい。

南郷大尉は、戦死後少佐に昇進し、空の軍神として一億國民から尊崇されつゝある。少佐また以て瞑すべしである。

巧妙な敵の四機

松本少佐の指揮する〇〇機は、まだ仄暗い飛行場のすれ／＼までに急降下して逃げ遅れた敵を索めて爆撃を加へた。

第一弾によつて燃えあがつた敵機の炎々たる火焰で、飛行場は眞晝のやうに明るくなつた。その明るさの中に照りだされた敵機へ照準を定めて、凧つぶしに爆撃し瞬くうちに數機を炎上させたが、あわたとしく舞ひあがつて來た敵機もあつた。松本機は、問髪かんぱつを容れずこれを銃撃して次ぎ／＼に撃ち落した。

小川正一中尉のごときは、事變勃發してこの方、敵の攻撃に参加すること正に百回に及び、直接その指揮下にある部下たちもまた、攻撃百回の経験を積む荒鷲である。

剛膽沈着、しかも機を見てこれに善處すること敏捷はやびさ隼のごときものがある。そして、これは已に第二の天性となつてゐる。教へられて修得できるものではなくその尊い體驗から生れたものだ。

話は別だが、日露戦争の旅順攻撃の際、ある將校が前線視察に出かけて、長い間前線に奮闘してゐる將校とともに、戦場の一角に立つて戦況を視察してゐた。

視察にきた將校は、かねて鬼將軍と稱されるほど猛勇であつたが、まだ實戰の經驗は持つてゐなかつた。しかし、それほどの猛勇であるから、敵の砲臺から見える地點に身を曝しながら、前線の戰況を見てゐると、突然、北鷄冠山砲臺から射つた砲丸が、この二人の將校の直前に落ちて、轟然と炸裂した。

この瞬間、視察にきた猛勇の將校は、びたと地上に平伏してしまつた。やがて、砂だらけになつた顔をあげると、前線の將校は平然として、いつもと變らない顔をしながら、

「初めては、誰でもその通りですよ」

と、平伏した將校を慰めるやうに言つた。

平伏した將校は、自分の醜態を大いに恥ぢるとともに、戰場における實戰の體驗といふものが、いかに軍人精神を鍛鍊するものであるかを、つくづく感じたところである。

攻撃百回に及ぶ小川中尉らが、敵機の舞ひあがる態度の中から、その微妙な動きを直感して、その裏の裏を搔き、僚機と協力して一氣に七機を撃墜したのは、この戦場の體驗からきた剛毅沉着と、機を見るに敏な第二の天性から來たものであらう。

小川中尉機と、その直接指揮下にある小野二空曹、山地一空の搭乗する〇〇機は、こんどは南昌の新舊兩飛行場の敵機を索めてゐるうち、舊飛行場にまだ燃えない十二機が行儀よく並んでゐるのを發見した。

好餌に武者慄ひして急降下してみると、何とそれは悉く巧妙に造られた囹機ではないか。

「ちえッ、うま〜と騙したな」

と、忌々しく思ひながら、さらに新飛行場に來て偵察すると、こゝにも囹機がずらりと並んでゐる。

「畜生ッ、こゝにも囀を使つてゐる！」

小野二空曹は、かういつて更に高度を降ろして精細に偵察してみると、ある、ある、その囀機の中に混つて、あちこちに並んでゐる十數臺の敵機——これこそ正真正銘の飛行機だ。

小野機は、これに向つて銃撃を加へて炎上させようとしたが、どうしても燃えなす。

(われらの任務は、敵機を撃破することである。この五機を眺めながら、おめおめと見のがすことは出来ない)

かう思つた小野二空曹は、咄嗟の間に飛行場へ着陸して銃撃することにした。といふのは、南昌飛行場を襲撃してから、已に三十分以上も経過してゐるのに拘らず、一發の地上砲火も發砲しないところを見ると、敵は狼狽のあまり全部逃走してゐると看破したからだ。

これも矢張り、小野二空曹が百練千磨の實戦の體驗による直覺である。

こゝにまた例を引くことにするが、日本海海戦に先だち、東郷聯合艦隊司令長官は、バルチック艦隊が對馬海峽を通るか、津輕又は宗谷海峽を通つて浦鹽に行くかといふ評議が出たとき、確信をもつて對馬海峽を通過するものと見てゐた。そしてその豫想は神の如く適中した。

また、日露戦争の際、陸軍の梅澤將軍は、

「今夜は敵が逆襲する句がする」

と言ふと、必ずその晩には敵が逆襲してきた。

だが、その句によつて、逆襲に對する戦備が出来てゐたので、敵は却つて大損害を蒙つて敗走するといふ始末であつた。

かうした豫感、直感といふものは、やはりその豊富な體驗からくるものであるが、一面には必ずその科學的推理が伴つてゐる。だから、理外の理とか、偶然の

一致といふものではない。

青島攻略戦の際、わが海軍のある掃海艇は、はるかの方から發砲して、物の見事に敵の敷設した機雷を爆發させたので、人々は驚いて占^{うらなひ}でもしてゐるのかと訊くと、艇長は莞爾として、

「機雷を敷設してある個所には、よく鷗が集まるものだ。それを目標にして射てば、たいていその下には機雷がある」と言つて、その豊富な體驗から來た推理によることを明かにした。

小野二空曹が、南昌飛行場には、すでに敵兵なしと推斷したのも、敏くも地上砲火のないことに気がついたからで、これもその豊富な實戦の體驗から來たものであることはいふまでもない。

マツチで敵機焼打

小野機は、これまでわが海鷲が幾度も繰返した爆撃によつて、どこぼこになつた飛行場の中から、一條の滑走路を求めて、やんわりと着陸した。

「あれ、小野機が不時着だ」

僚機たちは、一瞬驚愕の叫びをあげたが、しかしその着陸ぶりの鮮かさと、狭い滑走路を巧みに泳ぎながら、徐々に敵機群の方へ進んでゆくのを見て、「敵機撃破のための着陸だ」

と言つて、二度びつくりをした。

あゝ、何たる剛膽、何たる勇敢さであらう。

僚機の勇士たちは、たゞ舌をまいて、しばらくその行動を見まもつてゐたが、

小野二空曹らの上官である小川中尉は、小野機の萬一の場合を考へて、これも續いて飛行場に着陸した。

つゞいて、松本隊の各機が續々として着陸した。まるで味方の飛行場のやうな光景である。

すでに、夜は明け放れて、燦々たる旭光が飛行場を隈なく照らし、わが爆撃のために窪んだ地點には、敵の立てた三角の赤旗がたてられて、わが軍の道標のやうになつて翻つてゐる。

小野機は四機の間を縫つて真物の敵機に肉薄し、

ボタ、ボタ、ボタ、ボタ――

と、固定銃の射撃を加へたが、どの飛行機も燃えあがらない。

業を煮やした小野二空曹らは、ひらりと愛機から飛降り、まつしぐらに敵機を目がけて駆けつけた。

機翼に、青天白日旗を描いた敵機が、大きな圖體を、憎らしく横へてゐる。

小野二空曹は、翼の下に行き、手にしたピストルを放つて、敵機のガソリントankを破つた。その割目から、清水のやうなガソリンがどくどくと流れ出る。

小野二空曹は、マッチを摺つて、敵機の航空地圖を巻いてこれに火を點じ、それを力まかせにガソリントankへ投げつけた。

わつと火勢が起つて、敵機は忽ち黒煙に包まれた。

つゞいて他の一敵に、同様の方法で放火した。

僚敵たちも、同じ方法で他の三機を焼打にした。世界戦史上未だ曾てない新戦術である。

これこそ、わが海軍航空部隊が、剛膽沈着機に臨み、變に應じて單獨適宜の處置をとるべく教へられてゐた訓練が、ひとりで發揮せられたものである。

かの、ノモンハンの戦闘におけるわが勇敢なる陸軍が、サイダー瓶にガソリン

と襪はくろを詰めてこれに點火しながら、群がりくるソ聯の戦車に投げつけて、これを焼打にした戦法と好一對のものであつて、死生を超越して事にあたる眞摯敢闘の精神に燃ゆる帝國軍人にして、はじめて爲なしうる放はなれ業わざだ。

空征そらゆきかば、

花はなちる屍しかばね

大君おほぎみの

醜みにくの御み楯たてと

飛び立つわれは

これは、こんどの大東亞戦争に出征してゐるある空軍の作歌であるが、いみじくもわが空軍の烈々たる忠誠の至情をいひあらはしたものである。

手記に輝く海鷲魂

小川中尉機は、でこぼこだらけの滑走地區を避けつゝ、飛行場の周邊を滑走して格納庫前に出た。

敵は一人もゐない。

「何といふだらしなさだらう」

と思ひながら庫内を覗いてみると、こゝには一機もない。

たゞ格納庫の前には、二百ちかく疋つらぐらゐの爆弾が、裸はだかのまま十個づゝほど五六ヶ所に積みかさねてある。

「一體、この爆弾で何を爆撃するつもりだつたらう」

わが勇士たちは、あざけるやうにこれを眺めたが、しかし、もしこの爆弾で上

海あたりを盲爆したならば、昭和七年の上海事變のときに起つたやうな無辜の民衆に多數の死傷者を出したであらうと、思はず慄然とした。

やがて、敵が自慢にするE十六型の飛行機の前に來た。小賢しい相貌をした飛行機である。

「打てッ！」

小川中尉が憎々しげに號令をかけると、桑島二空兵曹が、旋回銃の彈丸を浴せかけた。本來ならば、かうした場合の攻撃は、固定銃で射つものだが、早曉來の激戦で、固定銃の彈丸は已に射ちつくされてゐるのだ。けれども、二十米の近くから旋回銃で急所を射つたので、E十六型は忽ち濛々たる黒煙をあげて燃えさかつた。

「ざま見ろ！」

同乗の偵察員桑島二空曹が氣味よげに叫んだ。

それからさらにその附近にあつたソ聯製のSB型を銃撃したが、これはいかに急所をうつても燃えなかつた。

これは、已にわが空爆によつて要部を破壊されてゐたのだ。

徳永二空曹と、別宮一空が搭乗する若鷺もまた、敵機を索めながら地上を匍ひまはつてゐる。やがて遂に一機を發見して銃撃を加へ、一瞬にしてこれを炎上せしめた。

また、濱ノ上三空曹と宮里一空が搭乗した一機は、でこぼこの滑走地區を巧みに乗り越えながら敵の三機を發見し、これを風潰しに燃えあがらせた。

「何か、この地上攻撃を記念するため、戦利品を持つて行きたいね」

濱の上三空曹が言ふと、

「敵の機銃を持つて行きませう」

と、宮里一空はただちに愛機を飛びおりて、燃えてゐる敵機に乗込んだ。

だが、いかに臂力の強い者でも、素手でこれを取外すことは不可能であつた。そこで、機上にあつた弾倉二個を分捕つて愛機へ歸つてきた。

「それで結構だ。よい土産ができた」

と、濱ノ上三空曹は喜んだ。

この時であつた。

突如、格納庫の背後から、ダ、ダ、ダ、ダッと、あわただしい物音が聞えた。

「スワこそ敵の逆襲だ」

と思つた各機の勇士たちは、あまり手にすることのない日本刀とピストルを執りながら、ひらくと愛機を飛出して、音のする方角へ突進した。

空の勇士が、地上の敵と一戦を交へて、これを撃滅する覺悟だ。あゝ何たる勇猛心であらう。

だが、格納庫の裏手に出てみると、敵機關銃の銃聲と思つたのは、敵が今しも

四臺のガツリン補給車を運轉して、この危地を脱出しようとしてゐた始動の爆聲だつたのだ。

「おのれ、人騒がせをしやがる！」

勇士たちが一齊に襲ひかゝらうとした時、補給車は急に走りだして、一目散に場外へ逃げ出した。

「逃がしてなるものか」

勇士たちは、ボン／＼とピストルを放ちながら追ひかけると、敵車は凸凹のはげしい滑走地區を必死となつて逃げまはつた。そのエンジンの爆聲は、さながら最期の悲鳴のやうだつた。

補給車は、わが海鷲の爆撃で、摺鉢形に大きく開いた穴の中へ落ちこんだりして藻掻きながらひよろ／＼とした足どりで走つてゐるうち、二臺は場外の水田の中へ横倒しになつて燃えあがつた。恐らく、車内の敵は死んだのであらう。

遂に車外へ出て來なかつた。他の二臺は命からかく逃げうせた。

場内に、もはや一機も残つてゐないことを確かめた小川中尉は、

「全隊乗員」

と命令を下した。

地上に降下してから、二十分間の後であつた。

忽ち、各機は舞ひあがつて、見事な編隊を組みながら悠々として、基地に歸還した。

小川中尉の直接指揮するこの地上攻撃隊には、一人の負傷者もなく、飛行機にもこれといふ損害もなかつた。

しかも、南昌奇襲隊が、この日の戦闘によつた擧げた戦果は、

空中戦による撃墜

九機

地上及び低空銃撃による撃破

八機

焼打による破碎

五機

と、合計二十二機の敵機撃破といふ素晴らしい戦績であつた。

この戦闘の殊勳者小川中尉は、この戦闘に關する手記の中に、

「……その時の氣持は、決して手柄を立てようとか、名を擧げようとか、そんな不純な氣持は全然ない。ただ敵機を殲滅せずんばやまぬといふ與へられた命令に忠實な、純な氣持からの發動に外ならない」と述べてゐる。

全くその通りであると思ふ。

しかも、わが將兵をして、こゝにいたらしめるものは、尊嚴無比なるわが國體を温床とする至純至高の軍人精神によつて鍛へあげられた一死報國の純忠至誠であらう。

そして、この崇高清純なる氣持に特に拍車をかけるものがあるとするれば、銃後

國民のあくまで戦ひ抜かんとする旺盛な戦意と、烈々たる敵愾心からくる舉國一致の「まこと」であらう。

況や、現代戦は前線銃後の別なき総力戦である。だから萬が一、舉國一致の體制にヒビが生ずるやうなことがあれば、これは直ちに前線の將兵に微妙な作用を起し、いはゆる蟻の一穴より堤を潰すやうな恐ろしい結果となつて現はれぬとも限らぬ。否、古今東西の歴史は、あまりにも多く斯る事實を證明してゐる。

最も手近かな實例は、さきの世界大戦の際、ドイツ軍は最後まで一兵も自國の國境内に敵兵を入れず、海軍もまたます／＼その猛威を發揮して英・米・佛等の通商破壊に成功し、聯合軍に對して極めて優勢な立場にあり、いま一と押しといふ大事の瀬戸際にあつた。

ところが、米・英諸國の辛辣さはまる思想謀略によつて、國內の一角を攪亂されたのを手始めとして、その思想謀略戦は、疾風の枯葉を卷くがごとく全國民を

薙ぎ倒してしまつた。

前線のドイツ將兵は、他家の火事を消しに行つてゐる間に、自分の家へ放火されたやうな形となり、背を決して地團駄を踏んだが、もう取りかへしがつかなかつた。

前大戦におけるドイツの敗因については、今となつてはいろ／＼の理屈がこじつけられてゐるが、何といつてもこの銃後の舉國一致にヒビが這入つて、前線將兵をして、一舉に戦意を喪失させたことにあると斷言して憚らぬ。

わが國には、固有の國情があり、國民性があるので、斷然敵國の思想謀略戦などに乗るやうなことはない——と高を括つてゐる向もあるやうだが、それこそ敵の謀略の深刻さを知らない目出度い人々である。

現在の思想謀略戦は共產主義や、自由主義や、反戦主義などを真正面から振りかざすやうなことは殆どなく、固有の國情、固有の國民性を尊重しつつ、終局に

あいて反戦思想、共産思想、自由主義などを植ゑつける手段をとつてゐる。前者のごときは、思想謀略戦の舊式戦法となつてゐることを牢記すると共に、新式謀略戦のいかに巧妙にして、辛辣なるかを銘記すべきだ。

われらは、戦線の同胞が、小川中尉の手記のごとき純一無雑な氣持で、敵兵殲滅のために勇戦力闘しつゝある尊い心境を妨げるやうな行爲があつてはならぬ。それは、必ずしも目に見えぬ敵國謀略戦に踊らないことに戒心するばかりではない、日常の生活をいとなむ上にも、それが戦時國民としてふさはしきか、ふさはしからざるかを反省することも亦、舉國一致體制を強化するものとならう。

この闘魂

日清戦争の黄海海戦の際、旗艦松島の水兵三浦虎次郎氏が、瀕死の重傷を受け

て甲板に倒れながら、折から通りかゝつた副長に向つて、

「まだ定遠は沈みませんか？」

と訊ねて、その烈々たる闘志と敵愾心を示し、「勇敢なる水兵」として軍歌に、物語にその武名を傳へられてゐる。

また、昭和六年の上海事變の際、暗夜に突撃中のわが陸戦隊の一等水兵大村一三氏が、敵弾に倒れて動けずになつてゐるところへ、自分の小銃を敵弾に破壊された服部二等水兵が、上官の命によつて、負傷して倒れてゐる水兵の銃を取りあげようとする、すでに最期の迫つてゐた大村一等水兵は、むつくと頭を擡げて破鐘のやうな聲を絞つて、

「馬鹿ッ、何をするんだ。俺は今から撃つんだ」

と、その銃を力一ぱいに引きよせた。

服部二等水兵は、瞬間崇高至純の靈感に打たれて、

「おゝ悪かつた、さア撃てつ」といふと、大村一等水兵は、射撃の身構へをしようとしたが既に力及ばず、ぐつたりとなつて、

「天皇陛下萬歳」

と唱へながら、静かに息を引きとつた。

この話も亦、わが海軍軍人の烈々たる闘魂と、一死報國の忠誠を事實によつて示したもので、永世不滅の佳話として戦史に輝くものである。

この二つの佳話に傳はる海軍魂は、支那事變にも、大東亞戦争にも隨所に見られたが、その中からこれの一つ取りあげてみよう。

「敵に後ろは見せぬぞ」

昭和十二年八月十五日、わが海軍航空部隊の一隊は指揮官の龜義行大尉かめよしゆきに率ゐられて、蘇州にある地上の敵軍を爆滅すべく出動した。

この一隊の中に、今村實雄一等航空兵を操縦とし、中越健二等航空兵を偵察員とする艦上機が加はつてゐた。

前述の渡洋爆撃の項で述べたやうに、この日は海上には颱風が吹きすさび、海に近い陸上もなほ相當に荒れてゐた。

このため、中越、今村の一機は、他の二機とともに、密雲の中で大編隊からはぐれてしまつた。

仕方がないので、臨機應變の處置をとつて、三機は杭州の喬司飛行場の敵を襲撃することに決し、眞夏の朝の漠々たる雲海の上を、あるひは地上すれ／＼の上空を越えて杭州上空に現れた。

この喬司飛行場は、敵が最も力點をおいたところであつて、敵から見れば最も

精銳な多数の飛行機を配備してあつた。

わが三機は、これを急襲して撃滅する覺悟だつた。

ところが、わが海鷲の急襲を知つた敵機は、わが三機が杭州上空に達するや否や、たゞちに舞ひあがつて、生意氣にも真正面から挑戦してきた。敵機はカーチス・ホーク型と、ノースロップ型だ。

わが三機の勇士は、願つたり叶つたりと打ちよろこび、直ちにこれに向つて銃撃を加へた。

頭上には、一面に密雲が垂れこめ、脚下には敵の地上砲火が狂氣のやうに吼えてゐる。

交戦數分、わが機は忽ち敵のノースロップ型一機と、カーチス型一機を血祭にあげた。血祭にあげられた敵二機は、長い太い黒煙の尾を曳きながら地下へ逆落しとなつて消え去つた。

このほかに中越機は、及腰おしびしといつた恰好かっこうで立向つてゐるカーチス型に向つて、猛烈な銃撃を加へると、敵機は急所をやられたのか、怪しげな飛行ぶりぶりで、飛行場内に不時着した。

空中の敵を一掃したわが〇機は、さらに敵の飛行場爆撃に移つた。

先づ、兵舎と滑走路に爆弾を叩きつけてこれを撃破した後、低空飛行をしながら銃撃をもつて、待期中の敵機五六臺を炎上させた。

すでに、空中にも地上にも、敵機の影を見えないといふ鮮かな戦果である。

〇機は、凱歌をあげて杭州上空を引きあげようとした時、突如、敵のカーチスシユライク型一機が、後から中越機に向つて挑戦したきた。

「敵に、後うしろを見せるな日本男子の名折れだ」

とばかり、中越機はただちに機首を轉じて反航攻撃を始めた。

敵機もさるもの、横轉、反轉などの特殊飛行をなしながら、執拗に喰ひさがつ

てくる。

中越機もまた、鮮かな特殊飛行をもつて、これを射止むべく奮戦してゐるうち不幸にも發動機のシリンドラーと、燃料タンクに敵弾が命中して、エンジンの回転はピタリと止まつてしまつた。

飛行機のエンジンは、人體にすれば心臓である。それに故障を生じて、プロペラの動きが止まつた以上は、もはや致命傷を受けたものだ。

高度は次第に低下して、遂に二百米になつた。大地がびん／＼と眼の中に飛びこんでくるやうだ。

「この上は、不時着のほかない」

中越、今村兩勇士は、かう決心して携へた日本刀とピストルを調べてみた。

地上は、何處を見ても敵ばかりの地域だ。地上へ降りたら、日本刀とピストルで最後の血の一滴まで戦ひ、いよくとなれば自ら眉間にピストルの弾丸を打込

むか、日本刀で腹眞一文字に掻切つて自決するまでだ——と思つた。

落下傘で飛べば、味方空軍のために救はれるといふ一縷の希みもあり、また敵のゐない地上に降りて助かるといふやうなこともある。

けれども、わが海軍航空部隊の勇士は、その基地を出発する時、その落下傘を機上から降ろし、その代りに日本刀とピストルを忘れずに持つてゆく。これはいふまでもなく、落下傘で通れて愛機を見棄るやうなことをせず、愛機と運命を共にする覺悟をもつて戦場に臨むからだ。

魂の銃撃六十發

中越、今村兩勇士を乗せた飛行機は、さらに刻々降下する。

いまはたゞ、空中滑走によつて、適當の着陸地を求むるよりほかないのだ。

と、どういふ機か、突然エンジンが調子のよい爆音をたてて動きだした。

「おう、エンジンが動きだした。天佑だ」

兩勇士は、天に向つて感謝しながら、なほも執拗に喰ひさがつてくる敵機に應戦した。

中越一等航空兵は、航空兵の生命ともいふべき冷静沈着なる態度と、眞摯敢闘敵を殲さざれば已まぬ勇猛心をもつて旋回銃を打ちまくつた。正に空の一騎打で往年の武士たちが、互に名乗合つて、一騎打をした壯烈な戦を彷彿たらしむる。

この時、中越一等航空兵は、残念にもその左胸部に四弾の盲貫銃創を受けた。普通人が、これだけの重傷を負つたならば、それだけで氣絶するのであるが、平素から鍛へに鍛へられた闘魂は、肉體の劇痛と不自由を克服して、魂だけで戦つてゐるのだ。

中越一空は、重傷のうちに弾倉を取替へて、さらに六十發を射つたが、敵機に

わが銃弾が命中したらしく、あわてて尻を向けながら密雲の中へ逃げ去つた。

それを見届けた中越一空は、初めて氣が緩んだのか、ぐつたりと銃座にしゃがんでしまつた。

操縦席の今村一空は、何かしら不吉なものを豫感したので、たゞちに傳聲管に口をあてて、

「あーい、中越大丈夫か？」

と、聲をかけた。

けれども、何の返事もなかつた。

今村一空は氣がゝりになるので、さらに傳聲管から、

「あーい、今村返事しろ！」

と、力一ぱいの聲を張りあげて呼んだ。

それでも返事がないので、今村一空は操縦席を這ひだして銃座を覗いてみた。

あゝ何と、中越一空は血に染まりながら、銃に手をかけたまま倒れてゐるではないか。

「あゝ中越、しっかりしろ！」

今村一曹が、中越、一空の耳元で叫ぶと

「おう」

と、かすかな返事がして、何か手さぐつたが、漸く航空地圖版を取つて、これを今村一空に渡した。けれども、もはやそれを手渡すだけの力がなく、ボタンと取り落した。

この地圖版がなくては、母艦の處在地點に歸還することができないので、瀕死の關頭に立ちながら、これを戦友に渡さうとするのだ。これこそ、その旺盛な責任感の發露でなくて何であらう。

今村一空が、ちよつとの間操縦席を留守にした間に、飛行機は思ふがまゝの方

向に飛んでゐた。今村一空は地圖によつてその無軌道な針路を修正して、一路母艦に向つたが、銃座の僚友を勵ますために、傳聲管から、

「中越、もうすぐ基地だぞ」

と叫んだ。返事があらうが、なからうが——。そして、基地の母艦までは相當の距離があつたけれども。

突然、前方の上空に一機の飛行機が現はれた。

「小うるさい奴だ」

今村一空は、すでに射手が瀕死の重傷を負つてゐるので、この上は、體當りで敵機諸共打ち砕く決心で、猛然と前方の飛行機に向つて突込んだ。

だが、よく見ると僚機であつた。あまり歸還が遅いので、心配して様子を見に來たのだつた。

今村機は、この僚機に導かれつゝ、二度と見ることの出来ないと思悟した母艦

へ無事歸還したのである。

臨終の希望

母艦の病室に運ばれて、軍醫官の手厚い治療を受けた中越一空は、奇蹟的に一命を取り止めた。

「中越が助かった！」

上官も、同僚も、整備兵たちも、この果敢な勇士が、瀕死の境地から生きあがつたことを衷心からよろこんだ。

分隊長たちが、その枕頭に見舞ふと、

「分隊長、敵のノースロップは墜ちましたか。敵もなか／＼やりますが弱いですね、私は大丈夫ですから、是非第二次攻撃に伴れていつてくださる」

中越一空が、昏睡状態から覺めて、初めて口を切つたのはこの言葉であつた。人々は、無量の感慨に撃たれて、たゞ頭を垂れた。

「副長、まだ定遠は沈みませんか」

あの勇敢なる三浦水兵の烈々たる闘志そのまゝである。

「俺は、これから撃つんだ」と叫んで倒れた大村水兵の勁烈な戦闘意識そのまゝだ。

司令官、艦長、副長なども相ついで見舞つた。その時、中越一空は上官に対する敬虔な態度と明瞭な口調をもつて、戦闘經過の概要をハッキリと述べた。

これは、支那事變の緒戦における空中戦であつただけに、他の實戦参加の勇士の報告とともに、今後の戦闘に資するところが極めて大きかつた。

その後、今村一空が第二次空襲に出かけることになつたので、飛行服を着けたまゝ中越一空のところへ挨拶に行くと、

「俺も行く、飛行服とバンドを持つてきてくれ」
と、寝臺から起きあがらうとして藻掻いた。

「機會は、まだいくらでもあるから、疵が癒るまで待つてゐろ」

今村一空はかう言つて慰めたが、どうしても聞き入れなかつた。今村一空も軍醫官も、その氣持を察して痛はしく思つたが、軍醫官は嚴然として、

「お前の身體は、お上に捧げたものではないか、自重しなければならぬ」

と、顫える聲で言ふと、彼は觀念したやうに、靜かに眼を閉ぢた。

分隊長が見舞に行くと、彼は嬉しさうな眼を開いて、

「あゝ分隊長ですか、いろ／＼と御心配をかけてすみません。もう二三日したら胸の痛みも癒ると思ひますから、その時はどうぞ又伴れて行つてください」と、熱心に頼むのであつた。

「よし／＼、その時はまた伴れて行くぞ」

「敵の飛行機は、もう出ませんか」

「お前たちが、あまり勇敢に遣つつけたもんだから、あまり出なくなつた」

「つまりませんな」

彼は、あくまで好敵に出會つて一戦をやりたい氣だつた。

この分ならば、負傷も次第に癒るのではないかと思はれたが、何しろ胸部に四弾も受けてゐるので、負傷してから四日目の十八日の正午すぎから、急に容態が悪化してきた。

この報に接して、今村一空が急いで病室に行つて、

「中越、氣分はどうか？」といふと、

「あゝ、今村か、俺はお前のお蔭で一命を取りとめたが、もう駄目だ」

と、すでに死期の迫つてゐることを覺つてゐるものの如く、これまで長い間苦樂を俱にしてきた僚友の顔を感謝と、思慕の情をこめた眼でじつと見詰めた。

「そんな氣の弱いことを言ふな。これからもまた一緒に空襲に出かけようじゃないか」

「うん！」

中越一空は、嬉しさうに言つて、

「夕食がすんだら直ぐ来て、あの搭乗員席の涼しい處へ連れて行つてくれ。みんなと一緒に話さうぢやないか」

「うん、すぐ来て連れて行つてやるぞ」

今村一空は、かうは言つたものの、瀕死の重傷者を動かして、搭乗員席まで連れてゆくに忍びなかつた。

けれども、せめて中越一空が最後の希みとしてゐる僚友たちとの親しい話の機會をつくりたいと思つて、ただちに僚友たちを枕頭に呼び寄せた。

みんなと一緒に話さうぢやないか——あ、何といふ厚味のある、情愛のこもつ

た言葉であらう。

搭乗員たちにとつては、夕食後のこの一と時が、何よりも楽しい團欒であつて、膝を交へて水入らずの話に花が咲く。戦闘の話、故郷の話、昨夜の夢の話——親にも兄弟にも話さないことを打明けて、お互に力となり、慰めあつて、渾然として一つの魂に熔け合ふのである。

この中から、無限の力が湧き、笑つて戦場に臨む勇氣が盛りあがるのだ。

そして、臨終の迫つた中越一空が、最後の希みとして、この楽しい集りを求めただけに一層人々の胸を痛めた。

その日の午後八時、中越一空は多くの戦友たちに見守られながら、満足の微笑を唇頭に浮べて、穏かな息を引きとつた。

大陸の制空權を握る

聖戰五年、この間に^{かん}おけるわが海軍航空部隊の勇戦力闘については、すでに讀者諸君の十分に承知してゐるところであらう。

事變發生後半歳目の昭和十二年十二月末までに、わが海軍航空部隊によつて、撃墜または爆破された支那軍飛行機は、確實なものが撃墜二百十六機、地上爆破二百三十八機合計四百五十四機、稍や確實を缺くものは、撃墜十六機、地上爆破二十一機で、確實なものとともに、實に四百八十六機の多數に上つてゐる。

事變前までの支那軍飛行機は總數八百機と稱されてゐたので、その半數以上を、實戰參加後凡そ三ヶ月半にして撃破したのである。

實戰に參加した昭和十二年八月中旬から約十ヶ月間の昭和十三年五月末までに

は、撃墜四百六十九機、地上爆破五百五機、合計九百七十四機に達し、完全に支那大陸の制空權を掌握するに至つた。

この撃墜破の敵機數が、事變前の八百機よりも多いわけは、事變勃發後、支那を誦らしてゐる米、英、ソなどからの飛行機と操縦者を送つたことによるもので従つて飛行機とともに撃墜された操縦者の中には、昭和六年の上海事變で、アメリカ人によつて操縦されてゐた飛行機を撃墜したやうに、多くの米、英、ソ人操縦者があつたことが想像される。否、現にソ聯の操縦者が撃墜された事實が確かめられてゐる。

さらに、昭和十三年十二月末までに、確實に撃墜破したもの千二百九十三機、不確實二百二十機、合計千五百三機といふ驚歎すべき戦果をあげ、現在までには恐らくその倍數以上に達してゐるであらう。

このほかに、わが海軍航空部隊によつて撃沈された敵の艦船も無數に達し、海

軍部隊の撃沈と相俟つて、事變勃發當時にあつた巡洋艦九隻、砲艦二十八隻、河用砲艦二十三隻、合計百六隻（約七萬噸）の敵軍艦は、完全に撃滅された。

なほ、わが海軍航空部隊は、米英ソ等の援蔣ルートを爆撃して、敵の運搬自動車軍需品、橋梁などを撃破すること多数に上り、あるひは敵都重慶を數十回にわたつて空襲し、敵の物心両面に與へた損害は測り知ることができない。

これと同様に、わが陸軍機もまた素晴らしい戦果を擧げてゐる。

その作戦區域は殆ど支那全土を鵬翼のもとにおき、雲煙漠々たる蘭州、昆明などの奥地まで攻撃して、敵の心膽を寒からしめてゐる。これは、世界空軍あつて以來の一大作戦區域で、さきの歐洲戦争の空軍作戦區域などは、その何分の一にしか當らない。

大東亞戦争によつてハワイ大空襲が決行された時、わが海軍航空部隊の猛烈な戦闘ぶりを目撃したアメリカの一新聞記者は、これこそ、日本空軍が五ヶ年にわ

たつて、支那大陸で縦横に活躍した體驗の所産であり、アメリカ空軍のごときは帝國海軍航空部隊に比較すれば、總ての點において半世紀も起ち遅れてゐる——と述べてゐる。

全く、その通りである。支那事變の勃發するまでは、わが荒鷲は世界何れの國よりも起ち遅れた幼稚なものであると見縊られてゐた。しかも一たび起ちあがるや否や、たちどころに支那空軍を全滅状態に陥らせ、世界を呀つと驚倒させたのであつた。

そして、この五ヶ年の戦闘は、アメリカの新聞記者が言ふとほり、わが海軍航空部隊をますます強化充實するに至らしめた。

蔣介石は、滿洲事變や上海事變は、支那に空軍がなかつたのであの慘敗をきたしたと稱し、その後益力を擧げて空軍の建設に努力したのである。

そして、米、英、ソ、佛、伊などから最新式の優秀な飛行機とパイロットを入

れ、昭和六年末には約二百機、同八年末には二百五十機、同十年末には五百機、同十二年四月には八百機を有した。

操縦者を養成するため、米、英、伊などの教官、顧問など六十餘人を聘し、杭州、洛陽、廣東などに航空學校を設けて、昭和十二年四月には、すでに七百五十餘人の操縦者を有するにいたつた。

昭和十一年、蔣介石は第一線機一千機保有を目標とし、孜孜營々として、明けも暮れても、空軍の充實に懸命の努力を拂つた。

そして、民間にもその協力を呼びかけ、蔣介石の何歳かの誕生日には、祝壽獻納機と稱し、強制的に九十七機を獻納させた。

支那事變は、その五ヶ年計畫の第二年目に勃發したのであるが、蔣介石はもちろん、彼を繞る軍閥は、その空軍に信頼し、支那空軍完備せりと稱して、大いに氣驕つてきた。

この時、陸軍もすでに二百餘萬人を有し、自ら大いにその精銳を誇つた。

この狂氣染みた空陸軍の擴張は、いふまでもなく日本と一戦を交へて、おこがましくも日本を征服し、東亞にその覇を唱へようといふ猿智慧からきたものであつた。そして空軍八百機、陸軍二百萬を得るや、蔣介石及びその一黨は、

「これだけの軍備があれば、もはや日本恐るゝに足らず、殊に、わが支那軍は陸軍も空軍も最近實戦の經驗を持つてゐるが、日本軍は滿洲事變以來その經驗がない。殊に支那空軍は、世界に優秀を誇る諸外國の飛行機を持ち、操縦者も銃手も、爆撃手も世界的權威者によつて指導育成されたのであるから、起ちおくれの日本製の飛行機で、日本人教官から教育された日本の空軍と比較して、問題にならぬほど優れてゐる」と、思ふやうになつた。

そこへ蘆溝橋事件が起つたので、彼は莞爾として會心の笑をもらし、

「時こそ來たれり、今こそわが空陸軍の實力を發揮して、日本軍を一撃のもとに撃破し、遠く日本本土を空襲し、日本國民を攪亂し、一舉に勝利に導いてやらう、さうなれば、米、英、ソ聯から、無限の援助もあるので——」

尤も、蔣介石をして、かうした考へを起させたのは、その背後から絲を引く米英などの謀略であつたから、援蔣物資は絶間なく送られた。といふのは、米英は支那事變を彼等の對日第一戦線と見てゐるので——。

ところがいよく實戦となつてみると、陸に、空に、海に連戦連敗、これまで蔣介石が唯一の頼みとした支那空軍は、海鷲、陸鷲のために、瞬く間に叩き潰されてしまつた。

蔣介石は始めて夢から覺めたやうに、
「こんな筈ではなかつた」

と後悔したであらうが、もう後の祭であつた。

殊に、わが海軍航空隊が、緒戦において稀有の大暴風雨の支那海を渡つて、彼の本據であつた南京を大空襲したことは、いよく彼の錯覺を是正したであらう。續いて、支那全土に及ぶ勇猛果敢な攻撃と、神業と思はれる大戦果を見ては、いまさらの如く日本空軍の強さを、しみじみと感じたであらう。

かれ蔣介石は、その青年時代に日本の陸軍士官學校に學び、日本の陸軍に在隊したことがあるから、凡そ日本の軍備や、その實力はどんなものであるか位は百も承知の筈だ。

けれども、彼が三年逆立^{さかだち}をしても學び得なかつたものがある。それは日本の軍人精神の眞髓だ。さらに日本の國民性だ。

敵を知り、己を知ることがは戦勝の秘訣であるとは、彼の國の祖先孫子の兵法にあるところだが、彼等には、日本の軍人精神や、國民性を知ることが出來ない。

それは尤もなことだ。なぜならば、萬世一系の大君の下、尊嚴無比なる國體の中に培はれた日本精神は、霸道、權道によつて天下を取つた元首の隆替常ならざる支那に育つた者には、たうてい理解ができないからだ。

大東亞戦争開始後、蒋介石の側には米英の飛行家が加擔して蠢動しつゝあるがこれまた支那空軍同様、わが海鷲、陸鷲のために息の根を止められつゝある。われらはこゝに斷言する。

いかに蒋介石が空軍の再建を企圖しても、わが陸海軍航空部隊が健在する限り、絶対にそれは不可能であることを。

あゝ、偉なるかなわが航空隊！

大東亞戦争と海軍航空部隊

一舉、世界は變貌す

大東亞戦争もまた、米英が日本の軍備や産業を、過小評價したことが、その動因となつてゐる。

なかんづく、日本の海軍——特に海軍航空部隊の實力に對する認識の全然誤つてゐたことが、日本を容易に屈服し得るといふ自信を懷かしむるに至り、そのため不遜にも日本へ喧嘩を吹きかけるやうな態度をとつた。

開戦前における米英の對日作戰なるものを見ると、米國は、北はアリユーシヤンから南はフィリッピンに至るハワイ、ミッドウエー、ウエークなどを含む馬蹄

型海空軍基地に據つて、日本本土の攻撃をなし、特にその空軍は大舉して日本の各要衝を爆撃することになつてゐた。

英國は、シンガポール、香港、ボルネオなどの基地によつて、これまたその空軍と艦隊により、米國と協力して一氣に日本を征服し得るものと確信してゐた。尤も彼等は、日本海海戦における日本艦隊の優勢を知つてゐる。支那事變における日本空軍の素晴らしい戦果も、知りすぎるほど知つてゐる。

けれども、前者はすでに三十數年前の過去の歴史に屬し、後者は相手が微力な支那空軍であるから、米英の最新にして精銳な多量の海空軍に對しては、鎧袖一觸のみと見縊つてゐた。

敵を侮る者の額ひたひには、結局敗戦の烙印が捺おさるゝことは、千古不易の眞理だ。

昭和十六年十二月八日、わが海鷲ひとたび羽搏はばたくや、ハワイの米海空軍は、一舉にして殲滅的打撃を蒙り、十二月十日には英國が不沈戦艦と恃んだプリンス・

オブ・ウェールズその他が、わが海鷲の猛撃によつて脆くもマレー沖の底深く一片の鐵塊と化し去つたではないか。

つゞいて、二月四日のジャワ沖海戦、同二十日のバリ島海戦、同二十七日より三月一日にいたるスラバヤ、バタビヤ兩海戦、四月五日から同九日にいたる東印度洋の英根據地強襲、五月八日から九日にいたる珊瑚海海戦、八月七日以來のソロモン海戦等々において、米、英、濠、蘭の海空軍兵力を完膚なきまでに撃破し、さらに濠洲に、アリュウシヤンに息も吐かせぬ爆彈の雨を投じて、わが海鷲の猛威を發揮してゐるではないか。

日本への進攻は、逆に米英および濠蘭への進攻となり、わが海上部隊の活躍と相俟ち、いまや東西一萬哩、南北五千哩の作戰區域において、索敵必殺の活躍をなしつつあるではないか。わが潜水艦の大西洋出撃は、さらにこの作戰區域を擴大してゐる。

また、わが陸軍は支那大陸の押へをピクともさせないばかりか、大東亞戦争開始以來、わが海軍と緊密なる協力の下に、香港、フィリッピン、ジャワ、スマトラ、ボルネオ、マレー、ビルマ等々を、無人の野を征くが如くに征服して、陸海軍協力にて、占領地の再建の堂々たる巨歩を進めてゐるではないか。

この爆音と、砲聲と、再建の槌の音こそ、天意に悖反するアングロ・サクソン本位の舊文明の破壊の轟音であると共に、道義日本を盟主とする大東亞建設の快リズムではないか。否、否、世界再建の雄叫びである。

現にわが海軍航空部隊が、一億國民の烈々たる愛國の至情と、灼熱せる敵愾心の凝結した巨弾を、真珠灣の米艦隊に叩きつけた瞬間から、世界の相貌は轉瞬にして變貌を呈したではないか。

米英よ！ この事實を何と見るか。

彼等は、この事實に直面して、始めてわが海軍航空部隊の底知れぬ實力と、善

戰善謀、勇猛果敢なる戦闘に、驚愕その度を失し、その當事者は、わづかに僞瞞せる戰況報告をもつて國民の眼と耳を誑らかさうとしてゐるが、嚴肅な事實は、これを僞瞞しをへるものではない。

果して米英の國民は、その當事者の日本の實力評價誤算に對する痛烈な非難をなし、國內輿論分裂の兆さへ見えてゐる。

また、米英兩國間に、互に戦争誘發に對する責任のなすり合ひをなしつつ、泥仕合をしてゐる。

要するにこれは、慘澹たる敗戦からくるものであつて、いはゆる貧すれば貪するの類だ。

ソロモン海海戦

二六八

哨戒機、大艦船発見

昭和十七年八月七日朝のソロモン群島周辺は、熱帯特有の物凄い濛氣と、スコ
ルに蔽はれてゐた。

わが海軍航空部隊の哨戒機は、この悪天候を物ともせず、早朝からソロモン海
の上空に出動して哨戒の任に當つて居た。

それは、米英の残存艦隊が大東おほたかになつて北上しつゝあるといふことを豫知した
からであつた。

氣象の悪條件のため視野は甚だ狭く、スコールは瀧のごとく銀翼から流れ落ち

その任務の困難なことは、たうてい筆舌につくせない。

けれども責任感の旺盛なわが哨戒機は、この悪天候と戦ひながら、全身の神経
を兩眼に集めて、一心不亂に索敵の任に當つた。

敵は、この悪天候を利用してソロモン海に入り、ソロモン島の一角に、その大
輸送船團に満載した兵員を上陸しようといふ作戦であつた。

相つぐ敗戦に、米英國民の、その政府並に軍當局に對する非難の聲が昂じ、
「なぜ、米英の陸海軍は守勢ばかりをとつて、積極的な攻勢に出ないのか。日
本の陸海軍が、あの廣大な土地を占領してゐるにも拘らず、米英軍は日本の寸
土といへども占領せず、占領地の寸土といへども奪還しないではないか。一體
米英海軍は何うしてゐるのか、生きてゐるのか、死んでしまつたのか」
と、齒に絹させぬ本當なことを言ふやうになつた。

これに對しては、さすが厚顔無恥な米英當局もぐうの音も出ず、事實によつて

まだ生きてゐるものもある——といふことを知らさねばならぬ羽目になつた。
 さればといつて、これまでの海戦の結果を明らさまに発表すれば、恥の上塗うはたぬを
 することになるので、何か一つ素晴らしいことをしなければ、國民を納得させる
 ことができなかった。

そこで思ひついたのが、米英の残存艦隊を狩り集め、これに多數の陸軍を積ん
 だ大輸送船團を護衛させて、わが皇軍の占領地であるソロモン島を奪還し、こゝ
 を足場として暴れまはり、あはよくば後續部隊を待つて、漸次に大東亞海の失地
 を奪還しようといふことになつた。

これこそ、わが海軍の衷心から希むところであつた。

なぜならば、一舉に敵の大軍を屠つて、完勝の期を早めるからである。それほ
 ど、わが海軍には不動の自信があつたのだ。

わが哨戒機は、その責任の重大なことに鑑みて、スコールと濛氣の中に、恰も

獲物を索むる秃鷹の如く、血眼になつて翔けづりまはり、一刻も早くこれを發見
 して、基地へ報告しようとなつた。そして、遂に必死の努力は酬かへひられた。

見よ！

まさに、わが海軍の海上部隊と航空部隊のために、米、英、濛、蘭の大艦隊が
 徹底的に撃破された珊瑚海に、數十線の眞白い航跡を曳きつゝ堂々たる陣容を整
 へながら北上する一團の敵艦船が、ぼつかりと濛氣の中に浮び出たではないか。

この一瞬、わが偵察機上の勇士たちは、自ら湧きあがつてくる感激の高潮かうたうに、
 全身の血潮が奔流するのを覚え、眼頭は熱く曇つた。

そして、この一瞬の感激のためにのみ生きてきたのではないかと思つた。

さつそく、根據地に向つて、無電のキーが叩かれた。その指先は感激に顫えて
 ゐた。

偵察機の勇士たちは、絶対に敵を見失はないやうに、しつかりと接觸を保ちつ

つ、敵の艦船數、艦種、陣形、速力、針路などを刻々に報告した。

二七二

敵機、火の玉の雨となる

「敵艦見ゆ！」

との無電を接した基地は、一齊に湧き立つた。

司令は、哨戒機から發せらるゝ刻々の報告によつて、敵の狀況を手にとる様に判断し、これに基いて慎重な作戦を練つた。

恰も日本海海戦の際、敵のバルチック艦隊を最初に發見した假裝巡洋艦信濃丸をはじめ、その他の哨艦が敵艦隊に接觸を保ちつゝ、事細かに報告した無線電信によつて、東郷聯合艦隊司令長官が、それに適應する作戦をたてて、遂にあの曠古の大勝利を博した事實が、三十八年後の今日になつて再現したやうな感じがす

る。そしてその戦果の偉大な點においても――。

すでに進發準備を終へて、たゞ出動命令を待ちあぐんでゐたわが海軍航空部隊の新鋭戦闘機部隊と攻撃機部隊〇〇機は、いよく司令の出動命令が下るや否や、勇氣凜々、敵を呑むの慨をもつて基地を進發した。

この時すでに、猛威を振つたスコールも一過して、空には南海特有の積亂雲がむくむくと大空一ぱいに廣がり、海は紺碧の波を湛へて澄みわたり、島々の美しい海島線に連る椰子林は、スコールに洗はれてますます鮮かな緑を増してゐる。わが偵察機の報告による地點に近づくと、水平線の上にハッキリと敵影が認められた。

巨艦巨船から吐きだす濛々たる黒煙は、水平線上に長く横はつて煙幕のごとく廣がり、一部の水平線はこれがために蔽はれてゐる。これを見ただけでも、いかに大艦隊であるか分る。

わが各機は、隼のごとく大艦隊陣に向つて飛んだ。

それと知つた敵は、各艦船の艦載戦闘機をカタバルトから打出して、我を邀へ撃つやうな姿勢をとりつゝ近づいてくる。

わが海鷲は、

「好敵ござんなれ」

とばかり、猛然として敵機の中に突つ込んだ。

敵の先頭に立つて双向つてくるのは、米國がその精銳を誇るグラマン戦闘機とビー・エス・シー戦闘兼爆撃機である。

彼等は、日本空軍何するものぞといつたやうな驕慢な態度で猛射を浴びせた。自信たつぷりに敵を呑んでかゝつてゐるわが方から見れば、それが小癩でたまらなかつた。

わが海鷲の前衛は、早くも猛然として敵機群の中に突込み、翼々相摩す空の白

兵戦を始めた。

ダ、ダ、ダ、ダ、ダ、ダッ……

彼我の銃聲と、銃口から吐きだす閃光は、耳を聳し、眼を眩まさんばかりの物凄さである。

「ヤッ！ 敵機が火を噴いた」

と見る間に、グラマン戦闘機が火達磨になつて、南海の青海原に眞逆様に突込んだ。つゞいて同じグラマン機が、次はビー・エス・シー戦爆機といふ風に、海に落ち込むことを競争のやうにして撃墜されていつたが、ビー・エス・シーの方は間もなく姿を消した。

それと見た敵艦は、大慌てに逃げながらも、主砲を始め、あらゆる艦載砲を總動員して打ちまくつた。

わが航空隊は、この下から逆に降るスコールの鐵雨の中を意にも介せず、羽搏

き凄じく、まつしぐらに突き破つて、敵艦隊群の上空に現はれた。

敵機は、味方艦隊に爆撃を受けさせまいとして、必死の力闘をする。だが、力闘すればするほど、一機、二機、三機、五機、十機と、火玉の雨のやうに墜ちてゆく。

早くもわが猛鷲は、敵の駆逐艦に向つて一發必殺の魚雷を叩きつけた。忽ち舷側から火を發し、ぐわつと天に沖する水柱が立ち昇り、見る／＼うちに大きく傾いて刻々と沈み、數分の後には水面から姿を掻消してしまつた。

さらにわが猛鷲は、他の駆逐艦に肉薄して魚雷を投げつけた。駆逐艦は猛火に包まれながら、慌てふためいて戦列を脱する。

「逃がすものか」

わが猛鷲は追撃の手を緩めず、さらに魚雷と爆弾を見舞ふと、一方の舷縁が、海水とすれ／＼になるほど傾いて、ジクザグ・コースをとりながら、全速力で濛

氣の中へ逃げ失せた。

敵の主力と輸送船團もまた全速力で、折からの濃密な濛氣と、夕闇を利用して逃走してしまつた。

すでに空にも海にも夕闇が迫つたので、わが海鷲は次の戦果を期して一旦基地に引きあげることにした。

この數刻の戦闘で、わが海鷲の討取つた敵は、駆逐艦一隻撃沈、駆逐艦一隻大破、グラマン戦闘機三十二機撃墜、ビー・エス・シー戦闘兼爆撃機九機撃墜といふ素晴らしい獲物であつた。

やがて、大空には美しい夕映が漂ひ、南半球特有の十字星が、端麗な姿をあらはし、いとも穏やかな平和な夕景となつた。

ソロモン海戦第二日

近代戦では、海を制せんと欲せば、先づ空を制しなくてはならぬ。

わが海軍航空部隊は、七日晝の空中戦で、大體敵の空軍兵力を撃破して、ソロモン海制空権を掌中に収めたので、八日朝は、敵の海上部隊を殲滅するため、必勝の大信念に燃えつゝ、敵海上部隊の遊弋する地點に向つて進發した。

敵は、昨夜わが軍の攻撃のなかつたのを幸として、輸送船に乗せてきた陸上兵の一部を、ソロモン島の一角に上陸させてゐたが、わが海鷲の兩度の大攻勢を見るや、周章狼狽して、すでに支離滅裂の陣形となつた。さのふの猛襲によほど懲りてゐるらしい。

わが海鷲は、先づ敵の旗艦ウイチタ型を屠るため、全力を擧げてこれに猛攻撃

を加へた。ウイチタ型は、ジグザグ・コースによつてこの危地を遁れようと、のた打ちまはり、残存の敵空軍と驅逐艦群は、これを上から、左右から、前後から防護したが、わが海鷲の必殺の空中魚雷は、瞬く間にこれを撃沈した。

ウイチタ型は、米國の甲級巡洋艦で、昭和十四年二月竣工、排水量一萬トン、備砲は二十センチ砲九門、十二・七センチ高射砲八門、魚雷發射管十二門、カタパルト二臺、平時の搭載機四、速力三十二ノットといふ新鋭である。

つゞいて他の甲級巡洋艦を瞬間にして轟沈せしめた。さらに息もつかせず、艦型不詳の甲巡一隻を大破せしめた上、乙巡二隻、驅逐艦二隻を次ぎ／＼に撃沈した。

上陸した敵軍は、わが空軍の猛威と、味方艦隊の慘敗ぶりを眼のあたりに見るや、色を失つて慄へあがり、先を争つて陸地脱出を企てた。敵兵を乗せたボートは陸地から沖の輸送船まで、幾筋かの橋梁のやうに續いてゐる。

わが海鷲たちは、敵の一兵も餘さじと、輸送船團とポートに向つて、空中魚雷と爆弾の雨を叩きつけた。

忽ち、各船に火災が起り、一瞬にして十隻の大船舶が沈んでゆく、ポートは爆風のため木の葉の如く吹き飛ばされ、片つ端から顛覆して洋上に逃げ惑ふ敵兵たちは、お互に救ひを求めつゝ、ブク／＼と沈み、あるひは猛魚に喰はれて、最期の悲鳴をあげつゝ、あたり一面の水を血に染めて沈んでゆく。恐らくその最期の悲鳴は、妻の名を呼び、愛人の名を叫んだのであらう。

戦場におけるわが皇軍が、臨終にあたつて、例外なく、

天皇陛下萬歳

を叫ぶ崇高なる日本精神に比べて、天地の差がある。

撃沈を免かれた一隻の敵船は、哀れな姿でよろめきながら、戦列を脱出した。ソロモン島にあつたわが警備隊は、敵兵の上陸以來、これと交戦してよくその

任務を守つてゐたが、わが海鷲の神技と、敵が浮足たつたのを機會に、勇氣百倍して奮戦した。

けなげにも、ソロモン島の奪還を企圖して上陸した敵は、その事前に殲滅されるに至つたのだ。

艦艇の夜戦

大弓引き満ちて未だ放たず、足摩しつゝ、脾肉を嘆じてゐたわが艦艇部隊へ、八日夜になつて、敵艦隊殲滅の命令が下つた。

各艦艇の勇士たちは、咽喉も裂けよとばかりどツと歡聲を挙げた。

満天、寶玉を鏤めたやうな星は煌々として輝き、折々、長い光芒を曳いて水平線下に落ちてゆく流星は、さながら敵機の墜落を遠望するやうであつた。

この夜戦隊は、水上艦艇部隊をはじめ、航空部隊、潜水艦部隊から編成され、空、海上、海中の三位一體の堂々たる立體的陣容である。

敵は、晝間のわが航空隊の攻撃があつて以來、その後の出撃がないのを見て一應攻撃が停止されたと思つてゐたらしく、あまりの打撃の大きさに、たゞ放心状態になつて、ソロモン海の一點に右往左往してゐた。

そこへ、突如として星明りの大空にわが海鷲の大編隊が現はれ、さらにソロモン海を壓する艦艇部隊の勇姿が現はれたので、敵は周章狼狽その極に達したが、窮鼠猫に双向ふ形で、應戦の態勢を整へてきた。

夜戦は、わが海軍獨特の戦法である。

日本海海戦の際、晝間の戦闘で敵艦に大打撃を與へた帝國海軍は、水雷艇の夜襲によつてさらに偉大な戦果を挙げ、遂に敵艦全滅の機運に導いたのである。

日清戦争の際、わが水雷艇の數度にわたる勇敢無双な威海衛夜襲は、遂に支那

の北洋艦艇をして降伏せしむるの動因をなしたのである。

前述の兩海戦は、日本本土の眼と鼻の先で行はれたのであるが、今やわが海軍は遠く故國を距ること三千哩の南海の洋上において、世界の二大強國の艦隊を相手として戦つてゐるのだ。

この作戦區域の雄大さといひ、一時に世界の二大國を相手とする大戦争といひそれだけ日本の一大躍進を示すものである。

忽ち、火光一閃してわが艦隊の砲門は一齊に開かれた。

見よ！ 闇夜の海上を、飛龍のごとく飛んだわが巨弾は、見ごと一發にして敵旗艦の急所を抉り忽ち、大火災を起こさせた。つゞいて、敵の各艦に炎々たる火柱があがつた。

狼狽した敵は、またく日本空軍の襲撃と見て、無茶苦茶に空に向つて發砲した。それと見たわが艦艇は、敵の真近に迫つて、一發必中の巨弾を息吐く暇もな

く叩きつけた。まさに舷々相摩すの接戦だ。

支離滅裂となつて、右往左往する敵艦に對し、わが艦上からサッと眼も眩むばかりの探照燈が放射された。

これを見た敵は、始めてわが海上部隊が、手の届くやうな近距離に接近して猛攻を加へてゐることに氣づいたらしく、恐怖と狼狽のさまが、その秩序なき動搖によつてハッキリと看取される。

敵旗艦——米甲巡アストリア型（一萬トン）は、わが集中射撃を浴びて、全艦これ火の塊となり、戦場の夜を眞晝のごとく照らした。だがそれも長くは續かなかつた。轟然たる音響と共に海底ふかく沈んで、海は再び元の闇夜となつた。更に魚雷は、夜目にも白い航跡を印しながら、鎌首を擡げた海蛇のごとく、するすると不氣味に走つて、敵の各艦に絡みかゝつてゐる。わが水上艦艇や、潜水艦や飛行機から投げつけたものだ。

敵は、空に向けてゐた砲口を漸く水平に直して射ちだしたが、もうその時は遅かつた。全艦ほとんどわが海上部隊の砲弾と魚雷と、さらに空からする空雷の命中を受けてゐた。

死物狂ひとなつた敵の砲火も熾烈を極めた。

けれども、それは徒らに空を切つて、わが艦艇の彼方に水柱をあげるに過ぎなかつた。狙ひが利かないのだ。夜眼が見えないのだ。

それには理由がある。

彼等は、いつも夕刻の作業が終ると、湯上りのからだに、眞白い洗ひたての服を着こみ、煌々たる電燈の下に集つて、トランプを弄り、ピアノを弾き、ピンポンをやり、小説を讀んで、夜の燈火を楽しんでゐる。そのために夜の闇に馴らされてゐない。第一日のわが海軍航空隊の攻撃以來、恐らく夜となく晝となく、空にも海にも警戒の眼を配つたであらうが、一日や二日で急に馴れるものではな

い。従つて、彼等の大砲や魚雷の狙ひが狂ふのは當然である。

それに比べると、わが艦艇の乗員は、夕食後の一と時が過ぎると、直ちに各自分擔の任務に従事し、晝間と大差のない作業をする。従つてよく夜眼が利く。

殊に、見張員の眼は、夜も晝もほとんど變らない程度に訓練されてゐる。眼ばかりではない、わが見張員はその五感によつて看視してゐる。波の音、波の香、潮流の寒暖等々、悉くその見張の資料となつてゐる。視力にいたつては、猫の眼と同様である。

わが方が、夜眼の見える猫の眼玉同様であるのに對し、敵は夜眼の利かない鳥眼であるとすれば、そこに自ら夜戦の利不利が生じてくる。

陸上勤務のある有名な海軍將校が、大東亞海に活躍しつゝあるわが軍艦を訪れた時、ある見張員が星空の關の海上を指して、

「あそこに敵艦が見えます、凡そ〇〇米、〇〇型です」

と、肉眼で眺めながら、確信をもつて言つた。

しかし、その將校にはどうしても見えないので、望遠鏡で覗くと始めてそれが見え、しかも距離も、艦型も肉眼で指摘したものと少しも變らなかつたといふことである。

不斷の訓練の結果でなくて何であらう。

その訓練された視力と、一發一中の神技と、さらに一死殉國の魂の籠つた砲弾によつて攻撃されたのであるから、いかに敵が藻掻いても遁れる途はない。

敵旗艦の沈没について、甲巡六隻と、乙巡オハマ型一隻を撃沈し、さらに驅逐艦六隻を相ついで撃沈し、二隻を大破した。

一舉、敵艦十四隻を撃沈、二隻を大破といふ素晴らしい戦果だ。

これだけの敵艦が、死物狂ひに射ちだした砲弾であるから、敵の眞近に肉薄したわが艦艇にも、いくらかの損害のあるのは免れないことであつた。即ちわが

巡洋艦は、戦闘航海に差支ない程度の軽微な損傷を受けたのであつた。

いかに逆宣傳の巧い米英でも、さすがにこの大敗と、わが軍の軽微な損害に對しては齒も立たなかつたらしい。

ソロモン海戦の大戦果

翌九日朝、わが海軍は殘敵の息の根を止めるため、少しも攻撃の手を緩めず追撃戦に移つた。

果して、昨夜の戦場から逸早く遁走した英國の乙級巡洋艦アキリーズが、全速力で南下してゐるのを捕捉した。彼は濠洲のシドニーに向つて遁走してゐたのであつた。

漸く虎口を脱して、ホツとした思ひでゐるところへ、彼等の最も恐れる海軍航

空部隊が、突如として現はれたので、辣みあがつてしまつたであらう。それでも萬に一つの危地脱出を期して、猛烈に發砲しながら逃げてゆく。

けれども、索敵必殺のわが海軍に狙はれたら、もうおしまひだ。忽ちアキリーズはわが空中魚雷の攻撃によつて火災を起し、瞬くうちに沈没してしまつた。

このアキリーズは、その僚艦エクゼターと共に、昭和十四年十二月十三日アルゼンチンのモンテ・ガイデオ灣に追ひこんだ獨逸の袖珍戦艦アドミラル・グラーフ・シュペー號を自爆の已むなきに至らしめた曰く附の軍艦であつた。その僚艦エクゼターは、すでにスラバヤ沖海戦で、わが海軍のために撃沈されたのでわが艦隊は完全に盟邦ドイツ軍艦の恨みを晴らしてやつた譯だ。

三日間にわたるソロモン海戦の戦果は、大本營から左の如く發表された。これは例によつて確認したもののみで、しかも内輪に見てあるので實際はもつと多いかもしれない。

一、撃沈艦船

- 米甲巡 ウイチタ型 一隻(旗艦)
 - 米甲巡 アストリア型 五隻(内一隻旗艦 内一隻轟沈)
 - 英甲巡 オーストラリヤ型 二隻(内一隻轟沈)
 - 英甲巡 艦型不詳 一隻(轟沈)
 - 英乙巡 アキリーオ型 一隻
 - 米乙巡 オハマ型 一隻
 - 乙巡 艦型不詳 二隻
 - 潜水艦 三隻
 - 輸送船 一〇隻
- 二、撃破艦船
- 甲巡 艦型不詳 一隻(大破)

驅逐艦

三隻(大破)

輸送船

一隻(大破)

三、撃墜飛行機

戦闘機

四十九機

戦闘兼爆撃機

九機

なほ、本戦闘における我方損害飛行機自爆二十一機、巡洋艦二隻輕微なる損傷を受けたるも、戦闘航海に差支なし。



このソロモン海海戦大戦果の意義は、米英聯合軍の、わが東亞海占領地の奪還の夢を一蹴したばかりでなく、ともすれば米英の偽囁宣傳に誑なやらかされて、その陣營に秋波を送らうとしてゐた中立國の態度を一變して、樞軸國に接近させることになり、これまでの米英のデマ宣傳を根本的に覆し、その國民をして政府を信

用せしめず、むしろこれに離反せんとする感情を誘發するに至つた。

わが海軍から見れば、敵がかゝる大東をもつて、わが占領地區に近づいてきたことは、豫て願念してゐた「思ふ壺」に這入つたわけであるが、その作戦の拙劣幼稚なことは、むしろ呆れるほかない。

これといふのも、要するに國民の非難に焦慮のあまり、無謀にも柄にない攻勢に出たのに基因するものと斷ぜざるを得ない。

われらは、こゝにソロモン海海戦の意義を思ふとともに、その大戦果の蔭に、壯烈な戦死を遂げた二十一機の勇士の英魂に向つて、满腔の感謝と、弔慰の情を捧げねばならぬ。

噫、この海鷲魂

一死殉國の責任完了

支那事變の頭初から、大東亞戦争にかけてのわが海軍航空部隊の世紀の勝利は、前述の戦歴に徴しても、その全貌を窺ひ知ることができるが、その蔭には壯烈鬼神を哭かしむる奮戦とともに、痛恨綿々として絶きない幾多の哀話もある。その數多い中から、二三の例を擧げてみよう。

五月八日から九日にわたる珊瑚海海戦の戦果は、ソロモン海海戦と共に、赤道直下において行はれた大海戦であり、また驚異的大戦果をあげた海戦であつた。

五月八日、〇〇航空下士官の操縦する哨戒機は、早朝から珊瑚海の上空を飛翔

しながら哨戒に當つてゐると、思ひがけなくも敵の大艦隊が、舳艫相ふくんで、北上してゐるのを發見した。

哨戒機は、たゞちに無電をもつて、この旨をわが海軍航空部隊の根據地に打電した。

基地から、敵艦隊航行中の地點までわが海鷲が飛來するまでには相當の時間を要する。この間にもし敵艦が針路を變へたり、俄に南洋特有の濛氣が起つたり、スコールが降つたりすれば、折角の大敵を見失ふことになる。

そこで、わが偵察機はあくまで喰ひ下つて、わが襲撃空軍の到着するまで監視することにした。

敵艦隊は、早くも哨戒機を發見して、高射砲を放つたり、艦載飛行機を飛ばしたりして、わが哨戒機を驅逐しようとした。

その都度、哨戒機は積亂雲の中に飛びこんだり、高度を高くしたりして敵の攻

撃を避けた。この際、わが哨戒機の任務は、敵と戦ふことでなくして、敵艦隊の状況を刻々報告するとともに、わが襲撃空軍を誘導することにあつたので――。

敵艦隊の飛行機は、この哨戒機を心憎く思つたのか、一氣に叩き落す氣で、精銳機による飛行隊が舞ひあがつてきた。

わが哨戒機は、これ幸と基地と反対側の方面に全速力で逃げた。これはいふまでもなく、哨戒機の無電によつて、今にも日本の荒鷲が襲來すると警戒してゐる敵航空隊に、反対の方面へ眼を向けさせようとする意圖からであつた。

果してそれから間もなく、敵機の大編隊が、哨戒機の逃げた方向に向つて飛んで行つた。

わが哨戒機は、うま／＼と敵がこの計略に引つかゝつたことを喜びながら、雲の中で敵から覺られないやう方向轉換をなし、再び敵艦に近い上空に現はれた。

◇

〇〇方面から、積亂雲を掻きわけて、雲霞の如きわが海軍航空部隊の大編隊群が姿を見せた。

哨戒機は、これに先驅して敵艦の上空に誘導して行つた。敵の空軍の大編隊はすでにわが哨戒機が偽つて逃げた方角を指して遠く飛び去つてゐた。

哨戒機は、早朝から長時間飛んでゐるので、ガソリンは残り少くなり、僚機を伴つてこれから敵艦隊の上空まで行けば、もはや基地へ歸るだけの量はなかつた。だから、僚機の到着とともに、たちちに基地へ歸るべきであつた。それだけのガソリンはまだ残つてゐたので――。

けれども、いまこれを誘導しなければ、わが僚機は方向を誤つて、遂に空しく素戻りをしなければならぬばかりか、敵空軍の大編隊と遭遇して、不必要な時間をつぶす惧れがあるので、哨戒機の〇〇下士官は、

(この際、自分が犠牲になれば、確實に大戦果を確實に擧げることが出来る。)と

決心し、依然としてその先驅となつて飛んだ。

わが編隊の指揮官は、哨戒機のガソリンに、今後どれだけの量があり、どれだけ飛べるかといふことを知つてゐたので、

「直ちに歸還せよ、敵艦隊の位置は見當がつく」

といふ意味の信號を送つた。

今、歸還の途につけば、どうにか基地まで歸れる。けれども、哨戒機はあくまでその先頭に飛んで進み、完全に敵艦隊のゐる位置に誘導したのを見届けて、始めてその任を完了した。

もはや、歸へれるにも歸れぬガソリンの量だ。歸還の途についても、途中で不時着水するのは分りきつてゐる。もちろん、哨戒機は一命を棄ててその責任を完了する覺悟であつた。

彼は、敢然として敵艦隊攻撃の火蓋の中に飛び込んで行つた。その結果 何う

であつたか、敢てこゝに述べるまでもあるまい。

あゝ、これこそ、わが海軍航空部隊の旺盛な責任感と、烈々たる一死殉國の氣魄の現れである。

北洋に羽搏く若鷺

アリユーション列島の敵の根據地を奇襲したわが海軍航空部隊は、三十分間にあまる戦闘によつて、敵根據地を徹底的に痛爆し素晴らしい戦果を挙げた後、編隊を組んで歸還の途についた。

この時、指揮官が僚機を調べてみると、一機だけ足りなかつた。

その一機には、巢立つて間もない〇〇歳と、〇〇歳の少年飛行兵が搭乗してゐた。それだけに、指揮官は痛ましく思ひ、無電をもつてしきりにその消息を求め

たが、何の返信もない。

指揮官は、一緒に戦場へ連れていつた愛兒が、敵の中で行方不明になつたと同様に心を痛めつゝ、

「自由行動をとつて歸還せよ」

といふ無電を發し、後髪つしうがみを引かるゝ思ひで歸還の途についた。

一方、編隊から外れた一機は、戦闘中發動機に故障を生じて速力が鈍り、編隊から遅れて歸還する途中、敵の數機に遭遇し、このうち二機を撃墜したが、その際無電機に故障を生じた。このため指揮官の無電にも返信が出来なかつたのだ。

しかし、沈着冷靜にその修理に取りかかり、漸くにして修理を終へた。

この時、日はすでに没して、北洋の波は物凄く荒狂つた。たゞ一機、この闇夜の北洋を飛んでゆくのだ。

やがて指揮官は、はぐれた一機から無電を受取つた、曰く、

「他に歸らぬ飛行機ありや」と。

つゞいて、もはや航續不能に陥つた、相濟みませんといふ無電が届き、その次には

天皇陛下萬歲

との無電が這入り、それ以來遂に消息を斷つてしまつた。

この少年飛行兵たちは、自分たちが最期に近づいてゐるのを忘れて、僚機を案じ、さらに尊いお上の飛行機を損じて申譯ないと言ひ、最期に 天皇陛下の萬歲を唱へて、従容として北洋の波に消えて行つたのである。

世界何れの國に死の直前までかゝる立派な心境の航空兵があるか。しかもわが海軍航空兵は、例外なくこれと同じ氣慨の持主である。

海軍飛行豫科練習生の話

少年飛行兵の殊勳

わが海軍航空部隊は、支那事變勃發以來、大東亞戦争にかけて、驚天動地の活躍をなし、敵軍を徹底的に撃破しつゝあるばかりでなく世界各国をして、いまさらの如く日本海軍航空隊の素晴らしい實力と、勇敢さとに驚倒せしめ、以てその國威を發揚しつゝある。

この海軍航空部隊の中堅幹部として、常に赫々たる武勳を樹ててゐるいはゆる若鷲と稱さるゝ勇士は、一般に少年飛行兵と呼ばれてゐる飛行豫科練習生として教育をうけて巢立つた人々である。

この飛行豫科練習生の制度は別項前述のやうに、昭和四年わが海軍が世界に率先して創設した帝國海軍獨得の制度で、すでに昭和十年までの入隊者は、この教育を終つて、立派な飛行兵となり、中堅航空幹部となつて、目覺しい活躍を續けてゐる。

即ち、支那事變においてはその當初から戦闘に参加し、世界航空戦史未曾有の渡洋爆撃に、あるひは空中戦に、あるひは爆撃に、勇戦奮闘して華々しい殊勳を樹てたことは世間周知のとほりである。

殊に、ハワイ大襲撃、マレー沖海戦、珊瑚海海戦、ソロモン海戦、アリユシヤン襲撃等々、その壯烈無比な戦闘には、海軍少年飛行兵の凄烈鬼神を避けしむる勇戦力闘と、殊勳に負ふところが多かつた。

空中戦は陸上戦や海上戦と違つて、往々にして敵と一機打をやることがある。それこそ、往時の若武者が名乗をあげつゝ敵中に飛込み、これぞと思ふ敵と取

組んで一騎打の勝敗を決する華々しい戦ひに髣髴たるものがある。男と生れてこの輝しい戦闘に當ることは、この上なき名譽といはねばならぬ。

さればこそ、愛國の情熱に燃ゆるわが青少年が、勇躍してこの名譽ある少年航空兵を志す者が年を追うて増加しつゝあるゆゑである。

少年飛行兵は將官になれる

この名譽ある少年飛行兵となるには、左の三種がある。

一、甲種飛行豫科練習生

(學歴は問はないが、その學力は中學三年修了程度で、滿十六歳から滿二十歳までの者)

二、乙種飛行豫科練習生

(國民學校高等科卒業程度の學力を有し、滿十四歳から滿十八歳までの者)

三、丙種飛行豫科練習生

(一般海軍軍人から採用)

この丙種は、海軍志願兵又は徴兵によつて海兵團に入團してゐる海軍軍人の中から、希望に應じて、適性検査を行つた後に選抜するものであるだから、一般から志願できるものは、甲種と乙種である。

先づ、こゝには甲種から述べてみよう。

甲種飛行豫科練習生は、専ら航空幹部を養成するために設けられた制度で昭和十二年に實現するに至つた。

毎年二回募集し、四月と十月に入隊することになつてゐる。學術と身體の検査に合格したものは、先づ土浦海軍航空隊に入隊する。

航空隊における教育は、二年半で終了するが、初めの一年半は、航空搭乗員と

しての任務を遂行するに必要な基礎をつくるのが目的で、主として軍人精神の鍛錬と一般軍事學を教授され、後の一年はいよく主眼とする航空幹部を目標に、これに必要な操縦術、偵察術などの技能と、航空術に関する高等の學術を併せて教授される。

そして、後期の教程においては、本人の適性その他の事項を考慮し操縦、偵察に別けて専修する。操縦は主として飛行機の操縦に関する學術技能を教授され、偵察、爆撃、射撃、雷撃及び通信に関する學術技能が教授される。

入隊すると、空二飛行兵を命ぜられるが、その服制はこんど改正せられて、今までの水兵服と異り詰襟七ツ釦はたんとなり、軍帽は下士官のやうに庇ひさしのあるものとなり、甚だスマートにして且つ凛々しい服装となり、あつぱれ世界に名だたる帝國海軍航空部隊の若鷲らしい威容を備へる。

入隊後六ヶ月後には、早くも飛行兵長に進み、後期の教程中二等飛行兵曹に任

ぜられ、同教程卒業後いよく艦隊所屬の艦船又は海軍航空隊において、實地勤務に服する。

それが終ると、累進して上等飛行兵曹となり、さらに練習航空隊選修學生として、約一ケ年間航空術に關する一層高等の學術技能を修得し、本教程修了後、間もなく飛行兵曹長（准士官）に進級する。

この間、他の志願兵出身者に比べて、極めて短年月即ち僅々約六年にして、すでに海軍航空中堅幹部として、名譽ある最前線に出動し、縦横無盡にその技倆を發揮することが出來、進んで少尉（高等武官）となり、さらに累進して上級の海軍航空幹部として重きを置くにいたる。從來の制度では、少年飛行兵出身者は、佐官まで進級する道が展けてゐたが、支那事變や大東亞戰爭における優秀な成績及びその非凡な素質に鑑みて、これを特別に優遇することになり、その成績次第で、軍人として最高の階級たる將官まで進級する制度が新たに設けられた。

即ち、いかにわが海軍が、少年飛行兵を重視してゐるかの證左でなくて何であらう。

海軍少年飛行兵となるには

前述のやうに、甲種飛行豫科練習生は、毎年四月と十月に入隊するが、一例として昭和十八年四月に志願のできる者は、左のやうな年月に出生した者となる。

大正十二年十二月三日より

昭和二年十二月二日まで

の出生者

志願書の提出期日、検査日割、検査所などは各府縣ごとに地方長官から、一般に告示されるから、志願者はその募集があつたら、親權者の同意を得た上で、一定の志願書を作成し、六ヶ月以内に撮影した半身脱帽の手札型寫真に、その表面

餘白のところへ、本籍地名を自書してこれを添付し、期日までに遅れぬやうに市
區町村長を経て、地方長官に出願しなくてはならぬ、昭和十八年四月入隊の者は
昭和十七年十二月がその出願期限になつてゐる。

詳細なことは、市(區)役所又は町村役場に問合せば、懇切に教へてくれるこ
とになつてゐるが、案内書は中學校、實業學校、市、區役所、町村役場にある。

なほ不審のことがあれば、最寄の海軍人事部(横須賀市、吳市、佐世保市、東
舞鶴市)又は地方海軍人事部、札幌市、秋田市、仙臺市、長野市、新潟市、名古
屋市、宇都宮市、大阪市、神戸市、金澤市、高松市、松江市、福岡市、熊本市、
鹿兒島市にある)問合せば腑に落ちるまで説明してもらへる。

検査は、第一次検査と、第二次検査とがある。

第一次検査身體は、昭和十八年四月入隊の場合についていへば、同年一月上旬
に各府縣の一、二の主要都市で行はれる。

第二學術検査は、第一次検査すなはち身體検査に合格した者の中から選抜し、
昭和十八年一月六、七日に鎮守府所定の海軍航空隊に召集して行ひ、こゝに始め
てその採用を決定するのである。

身體検査は、一日で終了するが、身體検査の規格は左表の如きものである。

體 格	年 齡			
	十八年以上	十八年未滿	十七年未滿	十六年未滿
身 長 (厘)	一五七	一五六	一五四	一五一
體 重 (斤)	四九	四七	四五	四一
胸 圍 (厘)	七九	七八	七七	七四
胸廓擴張 (厘)	六	五・五	五・五	五・五
肺 活 量 (立厘)	三〇〇〇	三〇〇〇	二八〇〇	二六〇〇
握力左右各 (斤)	二八	二六	二四	二二
視 力	各眼視力			
	一・二			

(註) この外に懸垂がある、懸垂とは吊された繩に片手でつかまつて五秒間自分の體を吊り下げるのであつて左右各一秒間宛耐へられなければならぬ。

學力試験と口頭試問

學力試験は、前述のやうに中學校第三學年終了程度を標準として左の科目について行はれるが、學歴の制限はない。だから國民學校初等科だけの卒業者でも實力さへあれば合格することになる。

數學(代數、平面幾何)、英語(英文和譯、和文英譯)、國漢文(國語、漢文)
理化學(物理、無機化學)、地理歴史(日本及び外國地理、日本歴史)
試験の順序は、

第一日 數學、理化學、國漢文

第二日 英語、地理歴史

なほ、志願者は國民學校初等科六年以上の通信簿、青年學校手帳、中等學校學籍簿若くはこれに準ずるもの又は學業に關する證書類など携帯せねばならぬ。

第二検査期間中は、航空隊内に宿泊して、兵食を給與せられ、また出頭及び歸郷に要する旅費は、現住地の市(區)町村で徴兵旅費を支給せられる。

採用されると、その教育費は一切官費であることは勿論であるが、昇進に従ひ俸給、航空加俸、航海加俸、食料を支給せられる。なほ下士官兵中は被服、糧食は官給せられ、また別に加俸及び手當などがある。

なほ官職階の呼稱は、昭和十七年十一月一日から左の如く實施せられた。

准士官	下士官	兵
海軍飛行兵曹長	海軍上等飛行兵曹	海軍飛行兵長
	海軍一等飛行兵曹	海軍上等飛行兵
	海軍二等飛行兵曹	海軍一等飛行兵
		海軍二等飛行兵

海軍少尉以上の官名は、海軍兵學校及び海軍機醫學校卒業者と同様である。

乙種飛行豫科練習生

乙種飛行豫科練習生の目的は、手續等も大體甲種飛行練習生と大差ないが、入隊は毎年六月と十二月の二回に行はれ、他の海軍志願兵と同時に募集される。

検査は、甲種同様に第一次検査と第二次検査が行はれ、採用されると總て海軍航空隊に入隊して海軍二等飛行兵となり、特別の教育を受け、約二年の間飛行兵として必要な學科や實習を教授された後、卒業までに飛行兵長に進み、豫科卒業に引續き飛行練習生を命ぜらる。本練習生の教育期間は約一ケ年で、卒業と同時に二等飛行兵曹となり、累進して將來將官となる道が開けてゐることは甲種と同様である。

制服、制帽は甲種と同じく、やはり七ツ釦に庇のある帽子を冠り、一見して甲乙の別は判らない。

甲種、乙種に限らず、帝國海軍が他の海軍志願兵に比べて、いかに少年飛行兵を重視し、そして優遇してゐるかは、この進級の速さや、昇進の道が軍人として最大級の將官まで開けてゐることや、服装が兵學校や機關學校生徒と殆ど同様である點から見ても明らかである。

この名譽ある少年飛行兵となることは、數多きわが國民の青少年中、最も選ばれた人々で、最も誇るべきである。

少年飛行隊の生活

検査の結果採用された海軍少年飛行兵（甲種、乙種）は、前述の如く入隊して

直ちに飛行豫科練習生となり、土浦海軍航空隊に入隊するが、こゝで、甲種飛行豫科練習生は一年半、乙種飛行豫科練習生は二年半、丙種飛行豫科練習生は六ヶ月の間、軍人精神の鍛錬と基礎的な普通學や初歩の軍事學を教育されることになつてゐる。僅かの期間に普通學は優に中學程度の、殊に數學等主要の課目は高等學校程度の力を與へられる。軍事學等は兵學校に準じたものであり、體育はまた柔劍道を始め、ラグビー、バスケットボールに至るまで、これを網羅してゐるのである。

隊の生活は、航空隊司令の下に各科長があり、専門的な教官には武官、文官の權威者があつて、豫科練習生を訓練し教育するのである。

訓練等を除いた豫科練習生の日常生活は、全體を各班に分けて、下士官の班長の統率のもとに、規律的な生活を送るもので、班長は親密と規律ある指導を行ふのである。

軍艦生活に準じて、ハンモックのつり方、くゞり方からいよく航空隊生活がはじまる。

六時の起床、洗面、早くも六時二十分よりは校庭にて皇居遙拜その他の朝の行事が行はれ、兵舎の甲板掃除（陸上の兵舎の廊下も甲板と呼ぶ）で、ピカ／＼とまた／＼間に清潔になる。

入隊の初め、午前中は御勅諭の講義が行はれる。

午後は陸戦の訓練だ。陸戦は軍紀教育でもある。新兵の訓練と同じく、不動の姿勢とか敬禮のやり方から始められる。

號令のかけ方も教へられる。

食事は一般兵よりも二割ましである。發育さかりの少年飛行兵だからであらう。隊の生活を二箇月もすれば、見違へるやうな身體と精神の持主となる。

ハンモックを吊つたり、くゞつたりするだけでも、初めは十分間もかゝるが、

それが五分となり、三分となる。

ポートを漕がされると、手はまめだらけになる。何もかもが訓練なのだ。

漸く一箇月たつと、はじめて東京への行軍となる。

午前午後にあたる教場授業の外に、體育實習時間が猛烈に行はれる。

柔道、剣道、銃剣術、角力、水泳、カッター漕ぎ、ラグビー、サッカーなど、訓練の基礎だけに火の出るやうなすさまじさだ。

少年飛行兵は、これらのスポーツを單なるスポーツとして行ふのではない。

こゝでのスポーツは、攻撃精神、犠牲精神、軍紀遵守精神、それらを涵養するための手段とされてゐる。

午後四時入浴、夕食後は楽しい酒保も開かれる。

夜の勉學が終ると、九時にはハンモックへ入る。

海軍少年飛行兵はかくして、生死を超越した軍人精神と、頑強な體力が養はれ

て行く。豫科練習生時代の課目は、甲種は數學、化學、物理學。乙種は右の外に地理・歴史・國漢文・英語。甲・乙・丙種ともに軍事學として砲術、航海、水雷機關運用術・通信發動機の整備、また前に述べた陸戰、つまり軍紀教育と陸戰の演習とを仕込まれる。

秋になると野外演習がある。海岸防備軍、攻撃軍と二手に分れ、陸戰隊として輕機重機を使用し、飛行機も協力して立體的な攻防戰が行はれる。演習は、民家に宿營して一週間行はれる。

かうした規定の訓練をすませてから、各人志望の飛行科について嚴密なる適性検査が行はれる。

適性検査は、機上、地上、心理の三科目があつて、その結果操縦と偵察のどちらかに分れる。

たとへば地上檢定は、地上練習機による檢定である。翼の長さ四米。胴の長さ

一米半位の臺の上に乗つた大型模型だ。

しかしその操縦桿はほんものと同様、前後左右にたふせば、前後左右に機體がかたむく。

それは電力と壓搾空氣によるのである。

これに乗せられて操縦の適性を検定される。機體は前進しないだけで、水平飛行も出来れば、旋回することも出来る。スイッチをいれると電動機で自動的に壓搾空氣が飛行機の各部に送られ、操縦桿、踏棒の操作によつて飛行機は動く。

調節一つで、氣流の悪い場合と良好な場合にする事が出来る。それが終ると愈よ宿願のほんもの、飛行機に乗る。

機上の検定は、教官の同乗で行はれる。

検定飛行作業としては、

「水平直線飛行」「降下水平直線飛行」「水平緩旋回」「緩旋回不良状態の回復」な

どの順序で行はれる。

一方、艦務實習が行はれる。海の荒鷲の本領は、あくまで怒濤逆まく洋上に敵艦隊を索め、防禦砲火の旋風を冒しつゝ、敵の主力を撃滅するにある。

敵を知るためには、先づ艦隊とはどんなものであるかといふことを知らねばならぬ。少年飛行兵達は軍艦に乗り込み、見學と同時に短期間の艦内實務にたづさはる。艦砲射撃の物すごい咆哮に、一度は膽をつぶすらしい。

かやうにして飛行豫科の課程を終つて、待望の飛行練習部に進む頃には、みな隆々とした身體、忠勇の意氣に溢れた軍人精神で十分に磨かれた科學的頭腦等を得て、立派な逞しい海軍軍人となつて、相當の地位についてゐる。

このとき偵察分科と操縦分科に進路が分れるのである。

この配置は、前述した適性検査によつて決められる。

豫科練習生時代相扶け進みあつた戦友がいよゝ操縦と偵察に分れて、霞ヶ浦

その他の航空隊で、一年間それ／＼待ちに待つた航空戦士としての技を磨くことになる。

「飛行豫科練習生」から「飛行練習生」に進みいよいよ荒鷲としての本格的な訓練に入ることになつてゐる。

この操縦分科、偵察分科とは何かといふに操縦分科では主に航空工学、操縦技術等を教育され、偵察分科は偵察、爆撃、射撃に関する學科や、無電の技術、寫眞を始めとして、大型機乗組員としてのいろ／＼の技術を習得するのである。

卒業後の進路

かうして飛行豫科を卒業し、操縦、偵察の各所屬部隊に入隊して、更に一年間の實地訓練を受ける。その上實用部隊、航空母艦に配屬され、毎日獨特の猛訓練

を受け、初めて一機にして千機に當り得る海軍飛行兵が出来上るのだ。かくして間もなく航空兵曹長、即ち准士官へと進路は更に躍進をたどるのである。

この兵曹長時代が最も長く、大東亞戦争で活躍してゐる海鷲の勇士は大部分この中堅幹部である。

約五年の後、少尉、中尉と本人の成績次第で將官累進の道が開ける、これは決して一部の者のみに限らず、少年飛行兵出身の殆んど大部分が可能な道であり、當局の期待も亦大きいのである。全く他の志願兵に比して較べやうのない立身と云へよう。大體飛行將校になるには、海軍兵學校を卒業しなければならぬ。

海軍兵學校に關する事は茲では今更喋々するまでもないが、海軍兵學校で三年八ヶ月の教程を終つて海軍候補生を命ぜられる。それから遠洋航海と實務演習を終へ少尉に任官の後、志願によつて飛行學生として航空隊に入隊し、そこで約一ケ年の間教育を受けてのち、海鷲として晴れの任に就く。それに比べると、割の

よい進級ぶりだ。

わが海軍航空隊の若鷲の赫々たる戦績は枚擧に遑がない。

しかも海軍航空隊は、あまたの優れた少年飛行兵を養成しつつ、ありしかも、彼等は来るべき日に備へて日々の訓練に怠りない。

皇威を輝かし、太平洋を護り、世界新秩序建設の第一線に立たんとする海軍少年飛行兵の自負と誇りこそ氣高く、男性的なものはないではないか！

海鷲の征く空と戦ふ海上は無限に廣い。しかも、戦ひはこれからだ。

希望に満てる青少年よ、そして華々しい國防の第一線に立つことを希む青少年よ！ 進んで海軍少年飛行兵たれ！ 海軍航空隊は勿論、大空も、大洋も、兩手を差しのべて諸君に笑みかけてゐるではないか。

海軍航空隊

(出文協承認)
あ 280207



日本出版文化協會
會員番號 120116

昭和十七年十二月十一日 初版印刷
昭和十七年十二月十五日 初版發行

(五、〇〇〇部)

● 定價 一圓八十錢

著者 永松 浅造

發行者 東京市麹町區麹町三丁目十二番地 廣安與三右衛門

印刷者 東京市麹町區麹町三丁目十二番地 清水 一 二

印刷所 東京市麹町區麹町三丁目十二番地 清水印刷所

發行所 東京市麹町區麹町三丁目十二番地 東水社

東京市麹町區麹町三丁目十二番地
電話九段(33)三五〇・二九〇・四二番
振替口座東京七一二九七番

元 給 配

日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

932
162

東水出版社版圖書目錄

皇國の書 詔勅講究所長 森清人著 一・五〇	人間の吉田松陰 品川義介著 一・七〇	海軍省推薦 海軍中將 魂植村茂夫著 一・五〇	陸軍・文部・文協推薦 陸軍中將 魂和田龜治著 一・五〇	くろがねの父 永松淺造著 一・五〇	轟沈 小笠原淳隆著 一・七〇	船は闘ふ 元淺間丸船長 安東陽一郎著 一・五〇	筆劍と人 松波治郎著 一・五〇	日本名將傳 松波治郎著 一・五〇	若き義勇軍 田村直治著 一・五〇	シンガポール 州五年 西村竹四郎著 二・三〇	海釣り三昧 谷口北海著 一・七〇	將棋上達四週間 八段 小泉兼吉著 一・五〇	將棋名局を語る 八段 金五郎著 一・五〇	將棋と人生 名人 木村義雄著 一・七〇	長篇小説 鐵の愛情 諏訪三郎著 一・三〇	愛は惜みなく與ふ中河與一著 一・五〇	科學小説 海底トンネル 寺島柁史著 一・八〇	忍術から スパイ戦へ 藤田西湖著 一・五〇	航空魂 陸軍中將 江橋英次郎著 一・五〇	海を征く 海軍大將 高橋三吉著 一・五〇	雷撃機 海軍少將 松永壽雄著 一・七〇
--------------------------------	--------------------------	---------------------------------	--------------------------------------	-------------------------	----------------------	----------------------------------	-----------------------	------------------------	------------------------	---------------------------------	------------------------	--------------------------------	-------------------------------	------------------------------	-------------------------------	-----------------------	---------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	------------------------------

送料各册内地一錢五分・外地二錢



⑤



東水社刊 ¥1.80